
ワイヤークラフト殺人事件

PhantaZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワイヤークラフト殺人事件

【Nコード】

N0541B

【作者名】

Phantaz

【あらすじ】

ワイヤークラフトに興味のある人もない人も楽しく読めるライトミステリー。

■ Prologue ■

「ママあ、ユカのパスワードなんだったつけえ？」

ユカがPCの認証画面を見ながら、首を傾げていた。

今は幼稚園の年長だが、脆そうな肢体は、まだ乳児の匂いにつつすらと覆われていそうにも見える。

抱き寄せて皮膚に鼻を近づけ、さり気なく嗅いでみようか。でも、それだと何だか自分がロリコンの性犯罪者みたいだ、とシオリは思った。

母親なのだから別におかしいことはないのだろうが、こういう変な世の中だと余計なところに気を使ってしまう。

ということで、その衝動は頭の中で放り捨てた。

「知ってるわけないでしょ。ユカしか知らないんじゃないや、パスワードの意味がないんだから」

「そうかあ」とユカはリビングを出て行った。自分の部屋に行ったらしい。

最近、大人に負けず劣らずPCや携帯を使いこなす子供も多い。でも、やはり5歳は5歳なのかな、と思うと、シオリは安心したような救われたような気がする。

やがて「あった、あった」とハローキティの小さなノートを手に戻って来る。

パスワードを見つけて入れたらしく、起動しつつあるPCの画面をじっと見つめている。

■ Act 1 ■

ユカはブラウザを開いてインターネットを見ているらしい。シオリは別に覗き見しているわけではないのだが、視界の隅でユカはお気に入りを開いて、その中のひとつをクリックしている。

そこには以前、シオリもアクセスしたことがあった。『Wire Kids』という子供向けに針金アートの解説をしているサイトだ。

時々一人で頷いたりしながらページを移動していたユカは、しばらくして、ディスプレイからシオリに視線を移した。

「ねえママ。あのね、明日はシウウ君のお誕生日なの」

「シウウ君の？ そうすると星座はいて座になるね。ふむふむ」

ユカは以前、シウウ君の写真をシオリ見せたことがある。シウウ君のパパの携帯サイトの中の写真だ。MTBに乗ってVサインをしていた。横にいるパパのようにヘルメットとウェアで身を固めていて、チャリも子供用とはいえ、けっこう本格的なように見えた。

「それでね、プレゼントをあげようと思うんだけど」

ユカは上目づかいの視線をシオリに向けた。シオリはユカの表情から、人馴れしていて甘えるのが上手な猫を連想する。

「ああ、わかったわ。プレゼントを買う予算が足りないのね」

ユカは大きく首を横に振った。

シオリの推測は正しくないらしかった。

「違うよ」

ユカはシオリを責めるような口調で言った。そこには、ちょっと蔑みの色さえ感じられないでもなかったのだが、5歳のユカの頭の

中に、そんなものがあつたかのどうかは定かでない。

「あのね、プレゼントは、どんなにお金を出して高いものを買うより、送り手の心のこもったものの方がいいんだよ。……ってケイコちゃんが言ってたんだけどさ。だから、あたしはワイヤーで手づくりしたものをあげるの。ま、この間、リカちゃんたちとサンリオシヨップへ行った時、いろんなもの買い過ぎちゃったってことはあるんだけどね」

ケイコちゃんが、そんなことを言ってたのか。まあ、なるほどだな、とシオリは思った。

ケイコママは園児の母親たちの間で、ちょっと浮いている存在だ。たいてい、自分の手づくりらしいプリント柄の作務衣のような服を着ていて、話の相手になると食品添加物だとか環境汚染だとかの話題をセミナーの講師のような調子で喋りまくられる。

初めはサヨク系の市民運動でもやってる人かと思っていたが、折々に渡されるパンフや小冊子を見ると、どうやら宗教団体の信者らしい。

ことあるごとに合掌して「ありがとうございます」を連発していた。

まあ、そんな人で、だから、ケイコちゃんがユカに言ったことは、何かの折にママから聞いたことの受け売りかもしれないかった。

「うっん」

ユカは『Wire Kids』のページをあちこち飛びながら考

え込んでいる。シユウ君へのバースデープレゼントに何を作るか迷っているのだろう。

「ねえ、ママも考えてよ。いて座の“いて”って何？」

「弓を射る人よ。こう構えて」

シオリはジェスチャーで示した。

「人間なの？ 難しそうだね。シユウ君、おひつじ座やかに座やうお座ならよかったのに。それなら、うまく作れそうだね」

「弓矢の形を作ったら？ でも、単純だから弓矢だとわかるように作るのは、返ってたいへんかもね」

「そうか。ああ、そうだ。マウンテンバイクならシユウ君も喜ぶね」

ユカは作り方の一覧を探して自転車をクリックした。

「あんまりかつこよくないなあ。これじゃママチャリみたいで」

シオリはディスプレイを覗き込み、写真を見た。子供が作るための解説だからシンプルだが、見てすぐ自転車とわかる形だ。

何も子供でなくても、シオリが、ちよつと動物の形でも作ったりすれば、シロウトからは「器用ね」とか「天才！」とか賞賛の嵐なのだから、この辺で充分なのではと思うのだが、ユカは満足できないらしい。

「もっとマウンテンバイクぽくて、かっこいいのじゃないと、シユウ君、喜ばないよ。タイヤが回ったりするのがいいな。動く三輪車って、あったよね。あんなふうに」

シオリは、どこかのサイトに針金細工の三輪車の写真が掲載されていたのを見た記憶があったが、昭和の時代に縁日などで売られていたのを、かなり高齢の人が今も作っていたのだと思う。レトロな味はあるが、ユカの求めているのとはたぶん違っだろう。

「ねえ、ママも考えてみてよ」

「そうねえ。でも、ワイヤークラフトは、デザインがあるのをその通り作るより、どちらかと言えば形を考える方が難しいからね。それに、あたしがお教室で習ってるのはペンスタンドとかバスケットみたいな雑貨系が中心だから、ちよつと傾向が違うし」

「ママが習ってる先生に聞いたりはできないの？」

「秋島先生はお忙しいから、そんなこと聞くわけにいかないわよ」
そういえば、このところ、お教室をサボっているなとシオリは思ったが、とにかく先生のホームページにアクセスしてみた。作り方の手ほどきや作品紹介に更新はないが、その辺りは何度も見ているから、ユカの参考になるようなものはないのはわかつている。

リンクのページを開いて、そこにあるワイヤーアーティストのサイトに行ってみることにした。

あちこち覗いてもMTBは見当たらなかった。立体的なバイクを作っている作家が何人かいて、ユカは、それを真似たらと言うが、シオリにはちよつと歯が立たないレベルだった。

器用だとか上達が早いとか芸術家だとか周囲から言われて、いい気になっているわけではなかったが、こういうところで自分のレベルはまだまだだと思う。

けっきょく、シウウ君へのプレゼントは弓矢の射手の形を作ることにした。書棚から星占いの本を取り出して、その中のイラストをもとに二人でデザインする。

図面を書かずに考えながら直接作っていくから、何度か途中でボツにする。もったいないとか遣り直しを面倒とか思っているのは、いいものではない。

弓矢を持つケンタウロスはギリシア神話に出てくるキャラだ。半人半馬なので、そのイメージを出すのに苦労したが、そこは何とかクリアできた。

ただ、シオリとしては全体を一本のワイヤーで作ることにこだわったのだが、それだと、どうも無理があつて、不自然に見えるてしまう。

もう、だいぶ時間も経っていたし、弓矢は別に作ってつけることにした。ビニールコーティングのワイヤーでつくっていたから、弓矢は別の色にする。

ユカは、この方が綺麗でいいと言ったが、あくまでも一本で作ってたかったシオリには不満が残った。

ダーリンの帰って来る時刻が近づいたのでシオリが夕食の支度を始めると、携帯の着メロがキッチンに響き渡った。

出てみると、予想していたダーリンの帰るコールではない。

電話してきたのは、シオリと同じく秋島淳子ワイヤークラフト教室に通っている堤夫人だった。

「こんにちは。しばらくだけど、お元気？」

堤夫人の声が聞こえる。見た目や落ちついた物腰は4〜50代であることを窺わせる女性だが、声や口調もそんな感じだ。

「あ、堤さん。ご無沙汰してます。ここのところ何かと用事があつて、お教室の方、サボっちゃってるけど……って、実はついに行くのが面倒になってズル休みだったり」

メールだったら、ここで“(笑)”とか顔文字や絵文字とか入れるんだけど。そんなことをシオリはふと思った。

「あら、そうなのお？ シオリさんは本当にワイヤークラフトに入れ込んでられるのかと思ってたわ。ほら、よく言う“飯より好き”ってやつかと……」

「ええ、お教室には顔を出してませんが、暇があると、けっこうワイヤーやペンチに手が出ちゃうんですよね」

「それなら、前よりだいぶご上達なさってるわね。教わらなくてもどんどんやっていけるのは才能がおりになるということだわ。先生だってシオリさんのことは……、あ、その先生のことなんだけど」
ここで堤夫人の声のトーンが急に変わった。

「あのね。さっき、藤本さん、ほら、やはりお教室の生徒さんのね。あの方からお電話いただいて知ったんだけど」

堤夫人は、まるで内緒話するように、いっそう低く話を続けた。

「秋島先生が亡くなったらしいのよ」

堤夫人の言葉は携帯電話から部屋の中に流れ出し、照明を何段階か落としていくようにも感じられた。

シオリは突然のことなので、どう対応していいかわからないまま、とにかく翌日だという通夜に出るための待ち合わせ場所と時刻を確認した。

■ A c t 2 ■

駅に近いコーヒーショップのテラスには、テーブルを囲む喪服のグループが見える。顔が確認できる距離ではないが、それが秋島先生のお通夜を訪れる生徒さんたちだとシオリは見当をつけた。店に入って行くと、その通り、見なれた顔が並んでいる。

一同を見回し、堤夫人と目が合った。

「ああ、シオリさん、私たちも今来たところだけど、これでメンバーはだいたい揃ったわね」

「どうも、この度は」

皆にそれぞれ会釈し、こう言ってからシオリは、はたして適当な表現だったかしらと自問した。まあ“ご愁傷さま”はちよつとおかしいだろうが、生徒だったら言わば身内だから、それほど変なことはないだろうと思ひ直す。

夕食を食べるのは遅くなりそうだから、シオリはラテとホットサンドを注文してテラスに戻った。テーブルに着くと、当然ながら、そこでは秋島先生のこと話題になっていた。

「でも、突然だったわねえ。ご病気なのかしら？体がお悪いようには見えなかったけど」

「最近、突然死する人が多いそうよ。先生、お幾つだったかしら？30代？でも、若くても、そういうの、けっこうあるっていうわよね」

「そうでないとする事故かしら。交通事故？ニュースでは、そういうのなかったと思うけど」

「交通事故は多いから、必ずニュースや新聞記事になるわけではないわ」

お教室の生徒さん12人の全員がここにいたが、挨拶程度しか言葉を交わさないで、顔と名前が一致しないメンバーもいる。

小さな派閥のようなものが幾つかあって、シオリは、そういうものに所属する気もなかったのだが、となると、なかなか雑談などにも入っていきにくかったのだ。

藤本さんが話しているので、シオリは、そちらに聞き耳を立てた。堤夫人に訃報を連絡した人だ。

「わたくし、先生のご自宅にお電話したら、お母様が出られたんだけど、事故だとおっしゃってたわ。でも、交通事故ではないみたい」

「先生は確か、お母様と二人で住んでらしたのよね」

「そう。親一人子一人なのよ。それで、お力落としのようだから、あまり詳しく聞かなかったんだけど」

どうやら彼女にも、よく掴めていないらしい。

「あのね、あんまり大きい声じゃ言えないんだけど」

その割りには、かなり声高だったので、それまで交わされていた会話が止まった。

声の主に一同の視線が集中する。

「新聞社から、今朝、電話があつてね」

この人、須藤さんと周防さんのどちらだったつけ、とシオリは頭の中で自問した。

「先生のことをいろいろ尋ねるのよ。最近何か悩んだことはないかとかさあ。それでね、なんでそんなことを調べてるのって聞いたんだけど、そしたらね」

それまでずっと沈黙していた彼女は、その間に溜まっていたもの

を一気に吐き出すように口を開いた。

「どうも、先生は自殺したみたいなの」

「自殺う？」

指揮者のタクトで歌い始める合唱団のように、それぞれが声を出した。もちろん声楽をやっているわけではないから、そこに美しいハーモニーが響いたりはない。

「でも、どうして先生は自殺なんてしたのかしら」

「小説家なんかだと創作に行き詰まったとか、あるわよね」

「そんなの昔の話よ」

「経済的に苦しくて、消費者金融の取立てに追われてた……、なんてことは、まさか、ないわよね」

あちこちで推測が始まっているが、どれも当を得た物ではないようだった。

「私たちの行ってるお教室は先生が、ご自分で開いてらしたわけだけど、他にカルチャースクールの講座が4箇所あったわよね。そののギヤラと、あと作品の売上げがあるわね」

「カルチャースクール側がしっかり儲けて搾取してるし、講師のギヤラなんて、そんなに出るものじゃないわよ。作品だって手間ばかりかかって、それほど高く売れるわけじゃないから宣伝みたいなものよ。その辺は皆さんもおわかりだと思っけどさあ。真面目に作ってたら時給は、普通のパートの何分の一とかになっちゃうわ」

「そうだわねえ、あたしも自分が作ったものをあちこちの店に掛け合っけて置いてもらってるんだけど、思うようには儲からないわ。先

生ほどではないにしても、まあ、そこそのものを作ってるつもりなんだけどね。家のローンはあるし子供もだんだん大きくなって物要りだから、何とかならないかなあ」

なんだか、ワイヤークラフトで何とかお金を稼げないかという話になっているような気がする。どうも、自分たちの興味がある方に話題が向いてしまいうらしい。

「だめだめ、ちょっとサイトを作ったくらいじゃアクセスだって知れたものよ。それに、買ってみようなんて人は見に来た人の1パーセントもないわ。ネット販売で儲かっているのは、オフでお店を構えて名が通ったり、宣伝費をばんばんかけられるところよ」

この人は、たしか遠藤さんだ。ドメインを取得して自分の作品を売るサイトを起ち上げたが、維持費すら出ないので止めてしまったと話しているのを聞いたことがある。

「安いものだと送料の占める割合が多いし、荷造りや発送の手間だつてたいへんよ。かといって、高い物は、なかなか売れないし」

「ヤフオクとかはどう？」

「今のネットオークションはバッタ商品売る、昔でいえば露店みたいなものよ。お客だつてとにかく安い物をつて連中ばかり。まあ、私たちがそこそこ満足できる実入りを得ようとしたら、気に入った物なら金に糸目をつけないって人たちを対象にしなきゃならないけど、そんな人たちは全然ないわ。サザビーのオークションなんかとは違うのよ」

んだだから、他人のを買おうとは思わないんじゃない？」

今まで会話に加わっていたメンバーは、いちように意気消沈し、うなだれたように見えた。

とどめを刺すように次の言葉が続く。

「それに、ワイヤークラフトのファンは、自分で作ってみたいって

人がほとんどだから、人を買おうなんて思わないんじゃないかな」

考えてみると、ミニ派閥はそれぞれ、ワイヤークラフトに対するスタンスを同じくする同士で集まっているのかもしれないかった。

今、主に喋っているのは作品を売って何がしかの利益を得たいと思っている人たちだろう。

シオリは頭の中で分類してみた。他には、インストラクターになって他人に教えたかったり、技術やセンスを磨くことが興味の対象だったり、ワイヤークラフトなど実はどうでもよくて、ただ話し相手を得るのが目的のグループなどがあるようだった。

「先生はマスコミへの露出も、あまり多くなかったよね」

インストラクター志向の人たちは、時々テレビに出たり著書を出しているワイヤーアート作家の名前を上げる。

「新聞で紹介されたりはあったけどね」

「その時は周防さんが取材を受けたんでしょ？」

そうか、あの人の名前は周防さんだった。

シオリが彼女に目をやると、今は聞き役に回っているようだ。自分の提供した話題でサプライズを巻き起こし、既に思いが満たされたのかもしれない。

今度は、話が途絶えたグループのほぼ反対側で、活発な会話が始まっている。

「外国のアーティストだと、美術館に作品が置かれてたりって、あるんですけど」

「やはり、日本は、どうもねえ」

「先生は私たちに教えてくださってるような雑貨だけじゃなく、オブジェでも素晴らしい作品を作られてたわ。テレビにちよつと出てちやほやされてるような人と、実力では勝るとも劣らないわよ」

「そうね。それに、出版者から本を出さないかという話はあったみたいよ」

「先生は、その気になれば、もつとマスコミとかに顔を出して有名になれたのよ。そうすれば、お金だって、もつと入ってきたはずだわ。ご本人は、あまり、その気がなかったようだけど」

「テレビなんかでカリスマとか持ち上げられえうようなブームなんて一時的なもので、すぐに忘れられてしまっからって、おっしやってたわ」

「実力は申し分ないんだけど、やはり、この世界、生活していくのはたいへんなのかしら？」

「資産家のお父様は数年前に亡くなったけど、事業の方はご親戚の方が後を継いで順調だと聞いたわ。お母様も役員に名を連ねておいてのようだし、経済的に困ってるなんてことはないんじゃないの」「ま、とにかく、経済的な問題が原因じゃないってことのようなね」「となると、あれかな？ 失恋」

この時、一同が身を乗り出したようにも見えた。女性週刊誌的なネタには誰もが興味を持つようだ。

「それはあり得るわね。というか、他に何か原因、考えられる？」

「でも先生に付き合ってる男の人って、いたのかなあ？」

「だって、独身だし、まだまだ若くてお綺麗だったわよ。そんなはなしのひとつふたつ、ない方がおかしいわ」

「そろそろバスの時間よ。斎場のほうへ行く路線は本数が少ないから、今度のへ乗らないと……」

堤夫人がグッチのバッグを手に立ち上がった。一同もそれぞれ身

支度を始める。

テーブルの上のホットサンドやパンケーキやタルトは順調に消費されて、それぞれの腹の中に治まっているようだった。

死が何らかのかたちで性欲を活発にするという話を聞いたことはあるが、食欲についても、そうなのだろうか

■ A c t 3 ■

翌日の葬儀では、お教室からの参列者が通夜より大分減っていた。昨日は日曜日だったから集まりやすかったが、ウィークデイとなると、皆、何かと雑事が多い。生徒さんには主婦が多いが、他の習い事やパートに行っている人もあるようだ。

焼香に行こうとした時、すれ違った女性を見て、シオリと行動をともにしていた堤夫人が少し怪訝な顔をした。

式が終わって帰りのバスの中で、堤夫人が言った。

「あのね、さつき、お焼香の時、すれ違った方がいたでしょ。シオリさん、あの方のこと、ご存知ない？」

「いえ、あたしの存じ上げない方ですが」

先生の別の講座の生徒さんか、あるいはインストラクターとかアーティストとかだろうか？

「やはり、ワイヤークラフトをやってる方ですか？」

「ええ、まあね」

堤夫人は、彼女がどんな人であるのかをシオリに話すことはなかった。シオリも、あえて尋ねなかったので、しばらくの間、会話が途絶える。

やがて、堤夫人は口を開いた。沈黙の間、次に何を話したらいいのか、あれこれ考えていたのかもしれない。

「ああ、シオリさんが、お教室に来るようになってからは半年くらいだったわね」

結局、話が遠回りで、先ほどの話題の核心を推し測ることはできない。何か、はばかる理由があるのだろうか。

「ええ、だいたい6カ月ですが」

「そうね。あれは、それより少し前のことだったわ」
堤夫人は、それを独り言のように言った。

間もなく終点の駅前に到着することを車内のアナウンスが告げる。
堤夫人はJR、シオリは私鉄で帰るので、バスを降りたところで
二人は別れた。私鉄の駅は歩いて数分離れている。

発車間際に駆け込み、走り出した車内を見回すと、座席に空いた
スペースがかなりあったが、シオリはドアの脇に立っていることに
した。

ただ参列していただけなのだが、それでも、けっこう疲れた。葬
儀が午前中で、朝食の後片付けもそこそこに出かけて来たためもある
のだろうか。そんなことを思いながら、シオリは窓の外を流れて
いく都下の町並みを眺めていた。

二駅ほど過ぎたところで我に返り、車内に目をやった。
向かい側のシートの中ほどに黒い喪服の姿がある。焼香の時、す
れ違った女性だった。女性はずっとシオリに注意を向けていたのだ
ろう。すぐに視線が合い、女性は自分の脇に座るよう身振りで示し
た。

シオリは、彼女の呼びかけに従って腰を下ろした。
たぶん、自分よりひとまわりくらい年上だろう。
喪服に籠っている防虫剤が、嗅覚を軽く刺激する。
自分の服も長いことしまっていたが、それには慣れてしまっていた。

感じなくなっていた。彼女のは違う製品のようで、やや違う香りだ。

「秋島先生のお弟子さん？」

「はあ、ピアフのお教室に通ってます」

「ああそう。やはりピアフの。堤さんと一緒にしたもののね」

秋島先生の生徒さんですか？ と尋ねようとして、シオリは、それを思いとどまった。インストラクターやアーティストさんで、ちよつとした人だったりしら失礼なことになる。

テレビに出演したり著書に写真の載っている何人かの有名人なら顔がわかるが、あまり裾野の広くない世界とはいえ自分の知らないエライ人もいるはずだから、うっかりしたことは言えない。

「秋島先生は突然でしたね」

次にどう攻めるか決まらないまま、とにかく話を繋いでいるようだ。

シオリは頷いた。

「私は出版社から訃報を聞きましたね」

彼女は一瞬、誇らしげな表情を浮かべたが、それを隠すように、すぐ真顔に戻った。

「堤さんは私のこと、何か、おっしゃってたかしら？」

「いえ、お知り合いのような感じはしましたが、別に何も」

話題を変えたというより、どうしても気になって、確かめたかったのかもしれない。

女性は、少しほつとしたように見つけられた

「ああ、申し遅れましたね。私はこういう者です」

女性はハンドバッグから名刺を取り出してシオリに渡す。シオリも自分のを出して交換した。単なる主婦だが、ワイヤー関係などで

いろいろ付き合いもあるから、いちおう名刺は作ってある。

受け取った名刺に目をやると、それは保険の外交員が営業用に使うものだった。

「別に、勧誘するつもりではないですよ」

会社のロゴ入りで、名前は川口加寿子となっている。

「ちょっと旅行していて、帰って来たのが昨日の夜なのよ。だから、お通夜は失礼させていただきしかかったけど、今日は何としても思っ

電車がシオリの下車する駅に近づいて減速する。

シオリが立ち上がると川口加寿子は、何かの時には連絡するからと言った。どんな時のことだろうと思っただが、社交辞令のようなものかもしれない。

その夜、ユカもダーリンも眠りについた後、PCを前にしていたシオリの脳裏に、ふと、昼間、電車の中で言葉を交わした女性のこととが浮かん

堤夫人は彼女がワイヤークラフトをやっていると言ったが、他の教室の生徒さんなのだろうか、それとも。もしかして、この世界では有名な人だろうか？

名刺によると保険の外交をやっているらしいが、ワイヤークラフトでは大物でも、必ず、それを職業にしているとは限らない。

彼女の名前をネットで検索してみたら、何か出てくるかもしれない。

貰った名刺を取り出して、“川口加寿子”をgoogleの検索

窓に打ち込む。同姓同名がヒットして紛らわしいこともありそうだから、スペースを空けて“ワイヤークラフト”を入れた。

ヒットしたのは巨大掲示板の中にあるスレッドだった。タイトルは『手芸雑誌について語ろう』だ。レスは800を超えていて、上からひとつひとつ読んでいくのは面倒だから、googleに戻って、そのキャッシュで見ることにする。

キャッシュで見るとキーワードのバックに色がついているから目当ての部分を見つけやすい。

ゆっくりスクロールしていくと“ワイヤークラフト”を含む書きこみがあった。

689：手づくりする名無しさん

xx/3/17 19:36:34

女性生活社発行の『月刊マイ・クラフト』12月号の記事『ゆうゆうワイヤークラフト』の中で紹介されている「あなたにも作れるフオトスタンド」についてですが、あのアイテムは私が開いている教室でのメニューにあったもののご指摘を複数の方からいただき、私も目を通したところ、作品の写真は明らかに私がお教えたものであり、また、記事の文章中には私が生徒さんに配布したテキストと同一の部分が多々見つけられます。

また、製作指導として名前を掲載されている方は、当時、私の教室に通っておられたことを確認いたしました。どのような経緯で、このような盗用行為が行なわれたのかはわかりませんが、これは重大な著作権侵害にあたると考え、編集部に対して事実確認の要請と抗議の書面を送りました。

回答をいただきましたら、このサイトにおいて、ご報告させていただきます。

ワイヤー工房」 秋島淳子

<http://...>

最後にあるURLを見ると、秋島先生のサイトの中のページであることがわかる。内容を誰かがコピーして、ここに張りつけたのだろう。

クリックしてみたが、そのページはもう、削除されているようだった。半年前のことだし、既に出版社側が納得の行く対応を示したのだろう。

まだ、“川口加寿子”は出てこない。

シオリは更にスクロールして、その後の書きこみを見ていった。

692：手づくりする名無しさん

xx/3/17 22：17：54

<<689の盗作やった香具師って誰ですか？
実名晒しキボン。

693：手づくりする名無しさん

X X / 3 / 1 7 2 3 : 4 1 : 1 9

<< 6 9 2 に同意。

『月刊マイ・クラフト』 1 2 月号を持ってる人、いませんか？

匿名掲示板なので、名前の欄を空けておくと、すべて“手づくりする名無しさん”名義の書きこみになるから、投稿したのは別の人かもしれないし、同一かもしれない。

もっとも、HNを入れたところで、誰であるか特定できるわけではないのがインターネットというものだ。

シオリは次の書きこみを見た。

6 9 4 : 手づくりする名無しさん

X X / 3 / 1 8 0 2 : 0 4 : 0 8

<< 6 9 2 << 6 9 3

私、マイクラフト購読してるので、手元にあります。

「製作指導：川口加寿子」となってます。

■ A c t 4 ■

ユカがアルミワイヤーで蝶の形を作っている。思うようにいかな
いらしくて、やり直した。

テーブルの上に失敗作がいくつか並んでいる。その中には傷が目
につくので止めたらしいものもある。アルミワイヤーはメタリック
の色が綺麗だが、柔かいから工具で表面に傷をつけてしまいやすい。

ワイヤークラフト用のビニールコーティングのワイヤーが適度に
曲げやすくいいのだが、今日は切らしているのだ。真鍮線は、ち
よっと形を取り難いためか、それとも見た目が渋い感じで好みでな
いからか、ユカはあまり使わない。

「ねえ、ヨーコおねえちゃんもやってみたら？」
ペンチとワイヤーを差し出すユカに、ヨーコは笑って手を横に振
った。

シオリがいつも思うことだが、ユカがヨーコを“おねえちゃん”
と呼ぶのはちよつと複雑な気持ちがないでもない。ヨーコは自分
と同じ歳だが、自分より目立って若く見えるわけではないだろう。
ま、向こうは独身なのだからいいか、とシオリは、そのことをあ
まり気にしないことにした。

ヨーコの前には、既に完成した切り紙の蝶と鋏が並べてある。単
に形を切り取っただけではなく、部分的に折って切ったりカッター
ナイフを使ったりして、中にも模様が描かれていた。

シオリと知り合った高校の頃、既に紙と鋏が通学カバンに必ず入
っていて、事あるごとに、その腕前を披露していたものだが、美大
では油絵をやっていたらしい。

いつもは、それほどワイヤークラフトに熱心な方ではないユカだが、ヨーコが来た時は、いつもペンチを持って彼女の前で作り始める。ヨーコは何か芸術のにおいのようなものをもっているから、それに共鳴するのだろうか？

いえ、あたしだって、ゆくゆくはワイヤーアーティストとして、ちょっとしたものになるつもりでいるんだから。今、作ってるような雑貨だけでなくオブジェなんかに挑戦して……。とシオリは思ったが、何事も不言実行だから、そんなことはダーリンにだって言うてはいない。

ユカは製作途中のワイヤーの蝶をかざして次をどうするか考えているようだったが、ひと休みすることにしたらしく、テーブルに置いた。

「ヨーコお姉ちゃんは、そんなに上手に紙を切るんだから、ワイヤーをやればきつとうまくなるよ」

ヨーコは、鋏と新しい紙を手にとって、何か切り始めた。ユカは、その手元をじっと見つめている。

「ねえ、ママ、そうでしょう？」

「そうだね。ワイヤークラフトと切り紙と、基本は似てるような気がするんだけどね。ヨーコが作ってる時とか、テレビの演芸番組で紙切り芸人の手の動きを見ると、紙切りは右手で持つ鋏は固定し、左手の紙を動かして切っていくのかな？」

ヨーコは頷いた。

「ワイヤークラフトも、右手のペンチはワイヤーを挟んで支えるのが主で、ワイヤーを持った左手の動きで曲げて形をとっていく。例外的に、工具の丸みを使って小さな輪を作るような時は右手の回転を使うけど」

ヨーコは美大を出ているから、アート関係の分野でシロウトが先んじているものに手を出すのには抵抗があるかもしれない。たとえば、それが高校以来の友人であつたとしても……。シオリは、そんなふうに考えたりもした。

とは言つても、ヨーコは偏狭だったり、やたらプライドが高いわけではない。

まあ、カルトの布教ではないのだから、シオリはいつも、執拗に勧めることはしない。

「ヨーコは切り紙の方でいっぱしなんだから、ワイヤーなんかに手を出さなくても、そっちでメジャーになれるよ」

「まあ、別にメジャーにならなくてもいいけどね」

女の子の横顔を切り終えたヨーコはうきうきした様子で言った。

誰に向かつてというのでもない、独り言のような感じだった。

「私は切り紙をしながら旅をしたいんだ。道端で売りながら、子供や、おじいさんおばあさんや、孤独で淋しい人や、いろいろ出会って話をして。でも、喜んでくれる人には、タダであげちゃうかもしれないから、儲からないかな」

なんだか、やたらハイになっているようだ。

少し前には、やはり本格的な絵の方で頑張つて、いい作品を描きたいと言っていたはずだが、ヨーコは、ころころ気が変わる。

付き合いの長いシオリは、そんなヨーコには慣れていた。

それぞれが、その時その時の純粋な気持ちで、別に嘘を言っているわけではないのだ。

ユカは、さっきの続きに取りかかっている。シオリが教えたから、右手と左手それぞれの役割をうまく使い、手さばきは、けっこう鮮やかだ。

やがて完成したらしく、「できたー」と片方の手でVサインを作りながら、もう一方の手で自作を掲げた。

「わあ、なかなか可愛いじゃん」

ユカはヨーコとシオリの拍手に満足げな笑顔を返した。

翌日の朝刊が秋島先生の死を伝えていた。ニュース面ではなく訃報欄だった。

以前、その新聞の趣味の特集で、先生や周防さんが取材を受けてワイヤークラフトの記事が掲載されたことがある。

秋島淳子氏

ワイヤークラフト作家

9日夜、自室ベッドで自殺しているのを帰宅した母、涼子さんが発見した。死因は鎮静剤と睡眠薬を服用し、ビニールの袋を被って窒息死。葬儀は近親者により、既に行なわれた。

シオリはインターネットで自殺に関するサイトを探した。検索すると、ちよつとやさつとで回りきれないほどの数が存在するのがわかる。それだけ興味をもっている人が多いということなのだろう。

数力所を回ってみるが、液晶の画面に映し出されるだけのものな

のに戦慄のようなものを覚えたのは、暗い配色のデザインが多いためとは限らないだろう。

よく晴れた午前中なのに、シオリの周囲に満ちている明るい光が翳るような気がする。

鎮静剤や睡眠薬を飲んでビニールの袋を被るのは最も苦痛の少ない自殺の方法だと、多くのページに書かれていた。

携帯が鳴った。

「はい」

シオリは携帯だと、いつも、自分の名前は言わない。

「俺だよ」

テレビの匿名取材に答える人のような声で話しかけてくる。ボイススクランブラーを使っているようだ。

「え……？」

「俺だよ」

誰なのか、全く心当たりがなかった。間違い電話かもしれない。それとも悪戯か……？

シオリは、ちよつとむかついた。

「オレオレ詐欺ですか？」

電話は切れる。

非通知だった。

■ Act 5 ■

来訪者を知らせるチャイムが鳴った。

モニターに男が二人映っている。

何かいい話をわざわざ他人のところにもって来る奇特的な人間など、まず、いないから、どうせ、詐欺師か宗教団体かレイプ魔か、そんな手合いに決まっている。

「はい、どちらさまですか？」

男の片方がカメラに向かって黒い手帳を突き出した。

「××警察署から来ました。ちよつと伺いたいことがありますて」
所轄がどこなのか、はつきり聞き取れなかったが、刑事のような感じはする。でも、警察手帳など簡単に偽造できるしインターネットでも売っているのだから、油断してはいけない。

シオリはチェーンロックをしたまま、ドアを少し開いた。

スーツ姿の男が二人、立っている。服もタイも高級ブランドではなさそうだが、かといって小汚い印象は受けなかった。

若い方の男は所属が書かれた名刺をシオリに差し出し、。もう一人は「高田です」と姓の方だけ名乗って軽く頭を下げた。

湾岸署から来たのではなかったしイケメンとも違うが、いちおう本物の刑事みたいだ。

渡された名刺を見ると名前は吉岡健二だった。

先生の家が管轄の警察署で、警部補となっている。

30前後と見られる年齢では、昇進の具合はどうなのだろう？
巡査長というのは、平の巡査からなかなか上がれない警官のために、試験なしで貰える階級だと聞いたが、シオリには、どちらが上なのかわからない。

吉岡はまずシオリの名前や住所などを確認した。形通りの手続きなのだろうが、相手が警察となると、ごくあたりまえの個人情報に聞かれるのでも、気分のいいものではない。

彼らの来訪の理由が、まだよくわからないから、なおさらだ。

「それで、奥さんは秋島淳子さんとはお知り合いですね」

「はい、ワイヤークラフトを教えていただきました」

「秋島さんがどうされたかはご存知でしょうか」

「先生は亡くなって、あたしもお葬式に行きましたが」

そんなことは来る前に、あらかじめ調べていないはずがない。刑事たちが、さり気なくシオリの表情や態度に気を配っているのは見え見えだった。

もっとも、それはプレッシャーを与えて何かを引出す方向に誘導するテクニクなのかもしれない。

吉岡はシオリの言葉に頷いてから続けた。

「そのことで、奥さんに伺いたいんですが、協力していただけますか？」

“協力”とはいふものの言葉の背後には、もし警察に協力しないとしたら、それは後ろめたいことがあるからだろっ、というような威圧を感じないでもない。

とにかく玄関で話すのは何なので、シオリは二人をリビングに通した。

「あのう、先生は自殺されたと聞いているんですが、刑事さんたちが来られたということは、もしかして殺人……？」

「あ、いえいえ、そうと決まったわけじゃないんですよ。それはですね。秋島さんは一人娘さんでしたので失くされたお母様にしてみると、自殺といっても心当たりがなくて納得できない。それで警察に来られて、もう一度、よく調べてくれないかと依頼されたわけです」

パコーレーターをセットしに行こうとした時、二人は、コーヒーや紅茶を接待されてはいけないうのでおかまいなく、と口々に言う。それで、シオリは日本茶を出した。

シオリの質問への答を、今度は高田という刑事が続ける。

「まあ、私どもの方では、自殺以外の死因を考えているわけではないんですが、お母様の気持ちはごもつともですので、納得されていくらかでも心が安まるのならと、あらためて捜査してみることになりました」

「今のところ、事件だと考えているわけではありませんので、ご安心ください」

吉岡に続いて高田も、何も心配ないことを繰り返した。

「まあ、警察も近頃は見過ごしなどいろいろあって、世間の批判を浴びたりしているでしょう。それはともかくとして、たとえ事件性はなくとも市民の皆さんに安心していただくようにすることが我々の仕事ですからね」

「そういうわけですので」

吉岡は手帳にメモを取る体制で質問に入った。

「奥さんは秋島さんに、何か教わっておられたんですね」

「ええ、ワイヤークラフトを」

「手芸のようなものですか」

「まあ、そう言えばそうです」

「それは、どちらで」

「ピアフという雑貨ショップ兼カフェの中で週1回開かれるお教室です」

高田はそこで吉岡の質問を制し、シオリに尋ねた。

「ワイヤークラフトって、ま、私みたいな古い人間にもわかるように言っと、針金細工のようなものですかねえ？」

「ええ、まあ、そんなようなものですけど」

正直言って、シオリは“針金細工”と言われるのが、あまり好きではない。その言い方には、どうも垢抜けないイメージがついて回るような気がするからだ。

年配の人たちは、こちらがワイヤークラフトをやっている事を知ると、懐かしそうに、縁日で売られていた三輪車や針金ピストルや知恵の輪の話をはじめることが多い。もちろん、レトロな雰囲気とか手づくりの暖かさを求めるのも悪いことではない。

自分のサイト名に使っているアーティストさんのように、逆説的な方法なら、それはそれで、かつこよさがあるのだが、そうでなければ“針金細工”はオシャレと縁遠い感じがして、シオリたちにはどうも、いただけないシロモノだった。

まあ、針金アートくらいなら許せるが、あくまでも、お子様対象の場合だ。

刑事たちは二人で話している。

「ワイヤーは、まあ針金かな。クラフトの方の意味は……」

「工芸ですかね？」

「ああそうか。日本語に訳したら、やはり針金細工でいいわけだ」

高田は英語が苦手なのか学校を出てから長いために、簡単な単語

の意味も忘れてしまっているようだ。

「ワイヤーワークとかワイヤーアートともいいますけどね」

「ワイヤーワークねえ。ワークは仕事とか労働だったな。そうすると針金仕事……？」

高田はギャグのつもりで言ったのかもしれないが、あまり面白くないので。シオリも吉岡も、ただ苦笑しただけだった。

「ジュエリーの分野では、ワイヤークラフトという言い方をしてるみたいです。古代エジプトの頃からあった技法ですね」

シオリは、お教室で製作の合間に先生から聞いた話や、インターネットで得た知識などを刑事たちに披露した。

「ワイヤーワークの始まりは、18世紀にチェコで、針金を使った鍋敷きや調理用ラックが作られたのだともいわれてますからね。産業革命以前に家内制手工業のようなかたちでワイヤーの日用品が作られていて、それは大量生産の時代になって衰退していったとも聞きましたけど。だから、ワイヤーワークはワイヤーで作った日用雑貨みたいなものを指すことが多いんじゃないでしょうか」

高田はリビングのあちこちに置かれているシオリの作品に目をやって、そのひとつひとつに頷きながら言った。

「ワイヤーアートですか。たしかにアートというか芸術ですねえ。」

いやあ、奥さんは芸術家ですよ」

そこにあるのはフルーツバスケットやフォトフレームやレターラックなどで、それを芸術と誉めそやすのでは、お世辞であることが見え見えだ。

もちろん実用的なものだったら芸術でないとはいえなくて、現代美術では日常そこに転がってるような物でも、アーティストさまのご宣託を授かると立派なゲーシュツ作品になってしまいうらしいが。

「そうだ。最近は見かけませんが、昔、道端に布を広げて針金細工を売っていた人たちがいましたねえ。注文すると、こう、ローマ字で名前を作ってくれたんですよ」

高田は両手でジェスチャーをして見せながら、吉岡に「あつただらう?」と問い掛けた。

「ああ、それなら私も子供の頃、見たような記憶があります」

シオリは、話に聞いたことはあるが、実際に見た記憶がなかった。でも、もしかして、小さい頃のことだから忘れてしまったのかもしれない。

「そうだ、こういう素適なものを作れるんなら、奥さんも売ってみたいいいんじゃないでしょうか。きっと、ばんばん売れて儲かつちやいますよ」

高田の言葉に、吉岡も作り笑いをしながら盛んに相槌を打つ。その様子は刑事というよりセールスマンだ。

「サイトを起ちあげて通販されてる方もいますよ。でも、どのくらい売れるんでしょうね」

「いや、ほら、最近若者に流行りのストリートってやつですよ。どこか人通りの多い場所です。そうだ、駅前とかスーパールの近くなんかいいいんじゃないですか」

「でも、道交法がどうかこうとかで、許可を取ったり、いろいろ面倒なんでしょう?」

「ああ、そんなのは大丈夫。そうですね。もし管轄の派出所の者とかが何か言ってきたら、あ、吉岡君の名刺を見せればいいかな。もし何でしたら私たちの方に連絡してください。話はつきますから」

高田はシオリの目を覗き込むように見つめながら続けた。

「まあ、暴力団の資金源になってるようなのだと困りますが、警察

に協力してくださる市民の方でしたら、悪いようにするはずがないじゃないですか」

こう言いながら高田は、いかつい顔を崩したが、目は笑っていない。鋭い視線をシオリに投げかけて、表情やそぶりにあらわれる僅かな動揺も、けっして見逃すまいとしているように感じる。

“警察に協力してくださる”という辺りが、なんだか意味ありげに聞こえないでもなかった。つまり、情報を提供すれば見返りがあるということなのだろうか？

「秋島さんは独身でしたね」

高田の話が一段落したところを見計らって吉岡が尋ねる。

「その、男性関係というか、おつきあいしている方はおられたんでしょうか？　まあ妙齢だし、綺麗な方でしたしね」

「そういうことは、ちよつとわかりません」

「ピアフに尋ねて行った人については、どうなんでしょう？」

「ピアフへですか？」

「あ、それもご存知なかったですか。それならいいんです」

その話は、ここで打ち切られた。

質問が途切れ、しばらくの間、沈黙が続く。

そこに生じた真空に吸い出されるように、シオリは、咄嗟に思いついたことを口にした。

「あのう、先生は睡眠薬を飲み、頭からビニールの袋を被って窒息死と報道されてましたが」

「ええ、その通りですが、何か？」

「それだと、袋が顔に直接被さってきて気持ち悪いから、睡眠薬を飲んでたにしても目が覚めてしまっんじゃないでしょうか」

吉岡が答えた。

「それはですね。中に枠を入れてあつたんですよ。お手のものなんと言つのは、ちょっと何ですが、針金でできてる、その、つまりワイヤークラフトで作られてたわけですけどね」

「ああ、ちょうど、あんな感じですね」

高田はフルーツバスケットを指差した。

「ああいう作り方でしたよ」

それから吉岡に向かって言った。

「そうだ。奥さんに見てもらってもいいかもしれんね。奥さんも針金、いや、ワイヤークラフトにはお詳しいんだし、何か私らシロウトでは気がつかないものが出てくることだってあり得るよ」

高田はシオリに説明した。

「署の方で保管してるんですよ。検死の時お預かりして行って、返そうとしたら、お母様が適当に処分して欲しいと言われたものですから」

警察署なんて想像するものといえば体育会系の汗臭そうな警官と、この世界でいちばん地獄に近い場所を這い回っている犯罪者たちとで醸し出す陰鬱な空気だけだ。拒否反応の方が好奇心を遙かに凌いでしまうのだが、シオリは秋島先生が自殺に使ったワイヤーの枠を見に行くことになり、刑事たちと日時まで打ち合わせてしまった。行きがかりというか、変な風の吹き回しで自分の気に染まない方へ事態が進んでしまうことも、たまにはあるものだ。

■ Act 6 ■

警察署では、予想したような長時間待たされることもなかったの
で、例のワイヤー製の柵を見るのは意外に早く終わった。

それから、シオリは電車に乗って私鉄が交差する駅で下車し、数
分ほど商店街を歩く。ファッション雑誌などで紹介される店も多い、
いわゆるオシャレな町だ。

メインストリートから少し横道に入ったところに白を基調とした
正面や内装の輸入雑貨&カフェ『ピアフ』がある。

時々店名を間違えて覚える人があるということだが、アクセサリ
を置いてはいるけれどピアスではないし、カフェのメニューには
あってもピラフではない。

オーナーが、エディット・ピアフというフランスの歌手のファン
なので、こういう名前にしたらしい。だから時々BGMに、シオリ
も知っている『愛の讃歌』が流れていることもあった。

「あら、シオリさん。お久しぶりです」

元モデルと聞いている長身の店長が微笑を投げかける。

「こんにちは、しばらくです」

お教室に足が遠のいていたから、当然、ここにもご無沙汰だった
のだが、店長の口調に嫌味な感じが全然感じられないのは救いだっ
た。

「秋島先生、大変なことになりましたね」
「ええ」

他の店員からも同様の言葉が挨拶代わりだったが、ま、仕方がな

いだろう。

「うちへも警察の人が、いろいろ聞きに来たんですよ」

店長は、それまでより声を潜め、身を屈める感じで言った。

「あれは、やはり、何か事件なのかしら？」

「そうでもないようだけど」

と言ったものの、シオリにも、実際どうなんだろうという思いがある。

「うちに来た刑事さんに、こちらに来た男の人のことを何か知らないかって聞かれたわ」

「ああ、ホームレスみたいな感じの人のことね」

「ホームレス？」

「先週の月曜だったわね。映画の寅さんみたいなトランクを下げて、それから、このくらいのダンボールの箱をキャリアで引っ張ってたわ。そっちはだいぶ重そうだった」

店長は両手を50センチくらい離して大きさを示した。

月曜日なら先生の亡くなった日だな、とシオリは思った。

「なんだか、その人もワイヤークラフトをやってるって言って、それで、先生と会いたいから住所か電話番号を教えてくださいって言うの」「え、その人、ワイヤークラフトをやってるの？」

「ああ、その人が作ったという物を置いていきましたよ。ここで売ってくれて言うの。値段はいくらでもいいから適当につけといてくれ。売れた分のお金は、また来るから、その時につて、私に押しつけるみたいにして」

店長は店の片隅を指差した。

「あそこに置いてある、ほら、あれですよ。私は、あまり売れそうもないと思うんだけど」

店長は唇を尖らせた。困ったものねと言いたいのを表情で告げて

いる。

「うちでお預かりしてる先生や生徒さんの作品を見て、いろいろ能書きをたれてたわねえ。俺は、その昔ヒッピーで、日本のワイヤークラフトの元祖だとか、俺のは固いワイヤーを使ってるから壊れにくい。自分みたいに年季が入ってないとやわいワイヤーしか使えないんだとか。何だか言うことはみんなピントが外れてるんだけど、とにかく、やたら自慢するの」

と言って店長は苦笑した。

「それで、その人は、先生に会ったのかしら？」

「どこの誰だか知らない人に住所や電話番号を教えるわけにいかないでしょ？ だから、うちから先生に電話して、その人と代わったんだけど、その時ちょうど、お客さまがいらしてね、そのお相手をしてたから、どんな話をしたかはわからないの」

「それから、先生のところに行ったのかもね」

「さあ、電話は奥にあるし、私はこっちに出ていたでしょう。会うことになったのかどうかは……？」

その時、初老の婦人が店に入ってきた。

ベールの付いた帽子を被り、何となくハイソで存在自体がアンテイクという感じのする人と言ったらいいだろうか。

この辺りの町だと、こういう人が出没しても違和感がないが、この店の馴染みの客のようだった。

店長が婦人と話し始めたので、シオリは店内を見回した。この店にはお教室の生徒さんや先生の作品も委託販売で置いてあるから、まず、そちらを見に行く。

お教室関係者の作品は既に見ているのと変わっていない。その横

に、例の男が置いていったらしい品物があつた。

ペンダントや指輪などだが、どことなく武骨な感じで垢抜けなかった。例えば綺麗な円を作るには丸い芯に巻きつけるといった、簡単な方法を知っていれば誰でもすぐできるレベルのものだ。

捻り線を丸くしただけの指輪は端をろう付けかはんだ付けしてあるが、接合の部分がありありとわかる。

どれもメッキがかかっていて、いちおうキラキラ輝いているが、安っぽいメッキだから、すぐに剥げてしまうだろう。

シオリも自分でいい出来だと思った作品を置いてもらったことがある。

フラワーベースだったが、後ろに天使のような羽根をつけてみたリ、ワイヤーの組み方も凝ったものを考えた。

作るのにはぼ一日費やしたのだが、シオリの手に入ったのは二千円ほどで、それでもピアフは良心的な方だから店の取り分が少ない。値段を高く設定したら買ってくれる人がいるかわからないし、手づくりのものを売るなんて、だいたい、そんなものなのだろう。

とにかく、まあ、自分が作ったものを誰かが気に入リ、買ってくれるのは、嬉しいものだ。

シオリは、そんなことを考えながら、他のコーナーに移動して、ティーカップやアンティークふうの人形やオルゴールなどを眺め、店内を一回りした後、先生の作品の中から、ひとつ選んだ。

レジで先ほどの婦人が話しかけてくる。

「素適な品ね。何かを入れる籠かしら？ 私は最近のものに疎いで失礼かもしれませんが」

シオリに釣銭を差し出しながら店長が答えた。

「ポットカバーです。ガーデニングの」

額く婦人にシオリは言った。

「これを作った方は私の先生で、先日亡くなったんです。いい形見をいただけたわ」

「そうなんですか。思い出の品ですね。ずっと大事にもっている
してくださいな」

「はい」

シオリは会釈して店を出た。

■ Act 7 ■

幼稚園から帰ってきたユカは、そのまますぐ、公園に遊びに行った。シオリが渡した硬貨を持って、コンビ二経由だ。

シオリは一人で3時のお茶を飲んだ後、警察に行った時、携帯で撮った写真をPCに移すことにした。画像をメールでPCのアドレスに送る。

画像処理ソフトでコントラストや明るさを調整する時、拡大することをおもいついた。やってみると、携帯の写真でも画素数がけっこう多いので細部まで鮮明に見える。

縦と横のワイヤーを互い違いに交差させた目の粗い籠のような構造で、枕の上に置き顔から頭の上を数センチの間隔で覆うよう、うまく作られている。これなら、ビニール袋が顔に触れて眠りを妨げることもないだろう。

自殺サイトに、首の部分にタオルなどを巻きビニール袋の端をテープで止めて密封すると書いてあったのをシオリは思い出した。

だが、そういうおぞましい使用目的は別にして、ワイヤークラフトの視点で見ると、直線であるべき部分は定規で引いた線のように伸びているし、曲線部には方程式のグラフのような美しさがあった。こういうのは少し不謹慎かもしれないが、秋島先生はさすがだな、プロだ、とシオリは思った。

その時、帰って来たユカが、じゃれてシオリに体を押しつけながらディスプレイを覗き込む。

「これ、ワイヤークラフトだね。何かのバスケット？」

自殺に使ったものだとも言えないし、どう説明しようかとシオリはあれこれ考えた。下手なことを言っているとユカはいろいろ質問してくるから、それもまた厄介だ。

「まあ、オブジェでしょうね」

「オブジェって何？」

「そうねえ、表現の対象といったらいいのかしら」

「よくわかんない」

シオリだって本で得た知識をそのまま喋っただけで、ちゃんと意味を把握できていないのだ。

「要するに芸術作品よ」

「何をヒョーゲンしてるの？」

「これは抽象的な作品だからねえ」

「ふうん。チューシヨー的なのかあ」

ユカは、部屋を見わした。シオリが今日、ピアフで買って来た先生の作品がテーブルの上に置いてある。ユカはしばらく、それを手に持ったり置いたり上下左右から眺めたりしていた。

「これもオブジェ？」

「それは、ガーデニングのポットカバーよ。植木鉢をその中に入れるの」

「作り方が似てるんだね」

たしかに、ワイヤーを交差させている辺り、造りが似ている。

「これと、その写真のとは、作った人が違うね」

「同じ人よ。秋島先生だもの」

「そうかなあ、何か違う感じがする」

たぶん、あらゆるジャンルのアートは、作風や“くせ”といったものが生じさせる作者ごとのオーラのようなものを発しているだろ

う。そして、ワイヤークラフトも、その例外ではない。

筆跡の違いのようなその人独特の雰囲気は、ワイヤーで描く絵やイラストといった作品なら、より顕著に表れるが、例えば雑貨のよ
うなものでも、それとなく出るものであることは、シオリもわかつ
ていた。

ユカは、それを言っているのだろうか？

でも、この二つの作者は、かなり技術が高く、ハンドメイドと
いうよりも機械で作ったように見える仕上がりだ。だから、稚拙さ
から生じる個性だったら、そういうものは見受けられない。シオリ
には、それぞれの間の差異を認識するのが難しかった。

同じ人の作品のようにも見えるし、違うと言われれば、そんな気
もした。

「やっぱり、どこか違うと思うよ」

ユカは、アニメの時間なので、テレビをつけた。

夜が更け、シオリのネット徘徊の時間がきた。

何か新しい情報はないかと、ワイヤークラフトのキーワードで検
索する。

あるネットオークションの出品物がヒットした。

ランプシェードだ。手間をかけた凝った造りで、デザインもソフ
ィステイケートされたものだとしオリは思う。

だが、ちょっと驚いたのは、30件以上の入札があり、現在価格が30万円を超えていることだ。まだ残り時間が2日あるから、落札時にはもっと高くなるだろう。

今までにもワイヤークラフト作品の出品物を見かけることはあったが、自分の見た限りでは入札のないまま終わることが多く、落札される場合でも入札は一人か、いいところ数人で、価格も数千円までだったろう。不思議な現象だなとシオリは思った。

シオリの気づかないうちにワイヤークラフトのブームが到来しているのだろうか？ どんな人の作品なんだろう？

シオリは興味津々でコメントに目を移した。

出品者は“株式会社ガイアフレンズ”となっていて、作者自身ではないようだった。

コメント欄にはサイズや素材などの後、次のような記述があった。<最近注目のワイヤーアーティスト、坊城小百合さんの作品です。彼女は近く著書を出版。また、全国各地で教室を開催の予定です。受講者はワイヤークラフト製作士各段階の資格を取得して、高収入に繋がるインストラクターやプロアーティストへの道が開けます>

出品に直接関係ない宣伝は禁止のはずだが、そんなことは他でもしばしば見かけられることだ。それに、管理者が隅々まで目を通すことは不可能だし、いちおうチェックはしていても、実際にクレームをつけたリ削除したりというような面倒なことは、よほどのことがなければしないのかもしれない。

坊城小百合は帰国子女で、海外にいる時、ワイヤークラフトを学んだというプロフィールもあったが、年齢などは書かれていなかった。

出身校はヨーコと同じ美大になっている。

“坊城小百合”で検索してみたが、何も出てこなかった。ガイアフレンズというのは出版社のようだが、最近できたのか、詳しい事業内容は、よくわからない。

シオリはマウスの横に置いてある携帯を取って、ヨーコの短縮ダイヤルを押した。

「ねえ、ヨーコと同じ大学の出身で、坊城小百合って人、知ってる？」

しばらく会話の間が空く。

シオリはいろいろと記憶を辿っているヨーコの脳裏を想像した

「ちょっと思い当たらないわ。大学で同じ頃在学の人だって直接の知り合いはそれほど多くないものだし、卒業生は、それこそ何万人もいるだろうしね」

それもそうだなとシオリは思った。それに、校名でヨーコのことか頭に浮かんだから聞いてみただけのことに過ぎない。

■ Act 8 ■

翌日、ヨーコから電話があった。

「ねえシオリ、明日の夜は空いてるかな？」

「これといって予定はないけど」

「じゃあ、ちよっと付き合ってくれない？」

「いいけど、何？」

「ちよっと、会って欲しい人がいるの」

誰に会わせようとしているのか聞いても、ヨーコは、うんまあ、としか言わなかった。でも、シオリには初対面の人物らしい。

待ち合わせ場所は中央線の駅前だった。

シオリを見つけたヨーコは歩いて来る途中で立ち止まり、携帯を取り出した。

しばらく画面を見ている。メールの着信があったらしい。

また歩き始めたが、せわしく親指を動かし返信しているようだ。

「今、彼からメールが来てね。急用ができたんで十時頃になるらしいけど、いいかな？」

“彼”と言っているから、会うのは男性なんだな。7時から3人で夕食の予定が変わったらしいけど3時間も待たせるのか。それだと、帰るのは予定より遅くなるな。

シオリは若干不愉快に感じないでもなかったが、それを言葉や態度に出すことはしなかった。

家の方は、ダーリンのお母さんが来てくれているから安心だ。

「いいよ」

「悪いね。じゃあ、それまで、そこらをぶらぶらして時間を潰そう」

学生時代や独身の頃は、よくヨーコとつるんで歩き回ったものだが、最近はずっとご無沙汰だった。こうしていると昔の気分が甦ってくるような気もするが、どこかが昔とは違っている。

若者の町と形容されるような場所で、周囲には、そういう年代が多かった。自分たちといくらも変わらないのだが、やはり、彼や彼女らと微かな距離があるような気がして、それが自分の中に違和感を生じさせるのだろうか？

そんなことをシオリは思ったりした。

二人は足の向くまま、本屋やCDショップやブティックを回ったが、お互いに立ち止まるコーナーが以前とは微妙に違っている。

しばらくして、町を散策するのにも飽き、ハンバーガーショップに入った。店内は人が多く雑然としている。

フィッシュバーガーとコーラを前にして、しばらく澱んだような時間が続き、シオリは何とか、それを断ち切るものがないか考えた。

しばらくして、前から一度行ってみようと思っていた場所が近くにあるのを思い出した。

「ねえ、ヨーコ。アートロッカーって知ってる？」

「ええ、知ってるわよ。学校の友達なんかが、よく使ってたわ。もうあの頃から長いこと行ってないけど」

「あたし、行ったことなくて、一度、見てみたいんだけど」

「そう言えば、この近くね」

二人はトレーからトラッシュに包装紙や紙コップを滑らせると、外に出て歩き始めた。

駅前を通ると、広場でストリートミュージシャンの青年がギターをかき鳴らして歌っているのが見えた。離れているためもあったか、

ギターがやたら金属音に聞こえる。声を出しているのがわかるだけで歌詞も聞き取れないが、曲はオリジナルのようだった。

学校帰りらしい女子高生が3人ほど、立ち止まって見ているが、通行人は、たまに一瞥していく人がいるくらいのものだ。

アートロッカーは、安い料金で作品の展示場所を提供するサービスだ。

前面がガラスになっていて中が見えるコインロッカーといったものがそれぞれ一区画で、スペースを借りたアーティストは、そこに収まる程度の大きさの作品を入れる。

販売しているものを買いたい時は、店員が鍵を開けて取り出してくれるシステムになっていた。

「シオリ、ここにもあるよ」

それぞれの中に作家の思いがこもっているためだろうか。初め、シオリは、数百はあるボックスを前に眩惑されたというか、放心に近いような状態だったが、ヨーコはまるで、あらかじめ、すべてを把握しているかのように、目ざとくワイヤークラフトの作品を見つけて出しては、シオリを手招きした。

いくつかのボックスには雑貨系やアクセサリーやオブジェなど、ワイヤーの作品が入っている。

ヨーコに導かれるようにしてボックスを巡り、もう、ここにあるワイヤーの作品は見終わったかなとシオリは思った。

ヨーコも「そろそろ出ようか？」と言っている。

だが、その時、シオリは奥の方に何かを感じた。

そのボックスとは距離があつたので、中がはっきり確認できたわけではない。でも、シオリは惹き付けられるように、その前に歩いて行った。

ランプシェードだ。

精緻に作られていて、美しい。

でも、そこにシオリはデジャヴュのようなものを感じた。それがどうしてなのかをしばらく考える。

やがて、その理由が思い当たった。

ネットオークションに出品されていた坊城小百合の作品に似ている。パクリとか盗作とまではいかないにしても、この作者は坊城小百合のランプシェードからインスパイアされているのではないか。シオリにはそんな気がしなくてもなかった。

シオリは扉の脇にある出展期間を見た。だいたい2ヶ月前から1ヶ月先までの3ヶ月になっている。アーティスト名は『ワイヤースタジોક』だった。

そうすると、坊城小百合が出品する以前からなので、偶然の一致かもしれない。ネットオークションならシオリは時々覗いているが、それ以前には出ていなかったと思う。もしかすると、他の場所で坊城小百合の作品を見たのだろうか。

シオリは外へ出るため引き返した。

ヨーコは先ほどの位置を動いていない。

■ A c t 9 ■

アートルockerを出て商店街を歩くと、もう、かなりの店はシャッターを下ろしている。

そのところでストリートミュージシャンが演奏していた。アコースティックな楽器で歌っているソロの人もあるが、エレキギターやPAや発電機を持ち込んでいるバンドもあった。

さつき駅前で歌っていたミュージシャンも、こちらに移動して来ている。

二人は、その前を通り過ぎた。

彼はリズムの切れ目に、一瞬だがシオリたちに視線を向けた。

「ちょっと早いけど、店で待ってようか？」

ヨーコは歩き疲れたらしい。

まだ9時半だが、他に行くところもないので、待ち合わせ場所の居酒屋に入ることにする。

居酒屋の店内は深海のようだ。有線のJ・POPや客の話し声や注文と店員がそれに応える声や照明を反射する内装材や紫煙や料理の匂いによってつくられた強い水圧が、そこに意味のない緊張を生み出している。

シオリたちの隣のテーブルには二人連れの男の客がいた。カジュアルな服装で、今日のバイトの話などしているから学生だろうか。

シオリは男性のファッションにあまり詳しくないが、たぶん、ジャケットもシャツもパンツもシューズもブランドもののような感じがする。

その二人はシオリたちが入って行った時だけ彼女たちの顔を舐めるように見つめたが、それからは話の切れ目ごとに、胸や腰や脚に視線を走らせていた。

店内を浸している音楽の波が干潮の時、彼らの会話の内容はシオリの頭の中まで届く。

初めは女友達の卑猥な品定めだったが、そのうち片方が近々誕生日だと言って年金の話を始め、手続きをしなければならないとか、学生だから免除申請できるとか、そうすると将来受給できる額が損だとか得だとか、蒔蓄の披露やつまらない心配を喋り続けるので、シオリは「あんたたち、老人になるまで必ず生きていられるつもりでいるの？」と聞いてやりたい気持ちになった。

シオリが時計を見て、そろそろ10時だと思った時、ギターケースを肩にかけた青年が入って来た。その姿には記憶がある。先ほどストリートで歌っていた人だ、とシオリは思った。

店内を見まわす彼にヨーコが手を上げて合図する。

彼がシオリたちのテーブルにつくのを見ると、隣のテーブルの二人はちよつと失望したような当てがはずれたような表情で一瞬顔を見合わせた。

もしかしたら、後でシオリとヨーコをナンパするつもりだったのかも知れない。

「ヨーコがあたしに会わせたいって行つてたのは、この人？」

「ピートよ」

「あ、よろしく」

「ピート、前に話したことのあるシオリよ」

ヨコから、ピートに関するこれといった紹介はなく、彼が自分で何か話すこともないまま時間が経過した。

3人ともほとんど無言でいると、隣のテーブルの話し声が余計耳に入ってくる。

「ところで、そろそろ就職活動をしないといけないよなあ。おまえ、やってるか？」

「そうだな。ま、ぼちぼちとな」

二人の話す口調は、どこことなく自嘲的に聞こえないでもなかった。顔が心なしに歪んでいるようにも感じられる。

「ニートやフリーターなんかになっちまったら、こんな世の中で、先々どうするんだよ。貰えるかどうかわからないとはいえ、就職すれば自動的に年金だって受け取る権利ができるぜ。それも、国民年金みたいな、そんなので生活できるかどうかわからないようなはした金じゃない。厚生年金なら、まあまあ額だろう？」

「不安定な生活じゃ結婚もできないし、一生社会の下層で生きてくなんて考えただけでもおそろしいよな」

二人はナンパの計画が狂ったので現実に戻ったのか、また。世知辛い話に戻っていた。もしかすると、ニートやフリーターというのはピートへのあてつけかもしれない。

彼がストリートで歌っているのを覚えているのか、それともいつも無関心で通り過ぎていただけかはわからないが、どちらにしても敵愾心を燃やしているかもしれないし、無意識に嫉妬や羨望を抱いていることだってあり得るだろう。

ピートの表情や態度には、二人の話に何か反応する様子が見られなかったが、平静を装っていたのかもしれない。

二人は間もなく店を出て行った。

ピートは、その夜、口数が少なく、喋る時も相手はもっぱらヨコだった。

暇をもてあましたシオリの手は、どうしてもレモンサワーのグラスに伸びることになる。

シオリは酔って、しばらく、うとうとしていたようだ。

「マンションを作るのが無理なら一軒まとめて借りちゃってね。そこに、そういうアーティストたちがみんな一緒に住むの。経済的に苦しい人だったら、家賃は出世払い。もちろん私たちが、それだけの才能ある人をメンバーに選ぶんだからね。最初にある程度のお金を用意すれば、充分可能なことだと思うわ」

眠りの国から戻るシオリの耳に、ヨーコの声がフェイドインしてくる。

酒に酔っているのか、それともピートが傍にいるから高揚しているのか、その相乗作用かもしれないが、とにかく、ヨーコは饒舌になっていた。

「そうだ、シオリも一緒にね」

シオリは話の顛末がわからない。

「アーティストが集まる、いわば村みたいなもの話です。シオリの夢ですけどね」

「ああ、でも、ダーリンやユカちゃんがいたね。ま、いいか。みんな一緒に連れてくれば」

「あれ、もう結婚してるんですか？」

ピートは意外という表情でシオリに言った。

ヨーコがそれに答える。

「シオリは、もう、5歳の子供もいるんだよ」

ヨーコは長い独白の場面を演じる女優のように続けた。

「子供は私も欲しいな。子供の感性つてのは、すごく豊かだからね。紙切りのイベントなんかで子供たちと触れ合っているとわかるんだ」

ピートはどう反応していいかわからないといった様子で黙っていた。

「ユカって言えばね」

シオリは、自分が通っていたワイヤークラフト教室の秋島先生が亡くなって、自殺といわれていること。聞き込みに来た刑事との行きがかりで警察署まで行って自殺に使われたというワイヤーの枠組を見たこと。シオリが撮って来た写真と先生のガーデニンググッズを見比べたユカが、その二つは別の人によって作られたと主張していることを話した。

「あの人と結婚するの」

上り電車では開かない左側のドアに寄りかかって、窓に映る車内をぼんやりと見ていたシオリは、ヨーコの声に、あわてて姿勢を正した。

「え？」

聞いたことはだいたい把握していたのだが、もう一度尋ねてみる。

「ピートと結婚するって約束したのよ」

「ふうん」

おめでとうと祝福すべきところだろうが、急に言われたので咄嗟には、こんな反応しかできない。

「シオリは反対？」

「そんなことないよ。おめでとう、ヨー」

「ありがとう。だけどね」

「だけど？」

「まだ、誰にも話してないんだ。両方の親にも」

「シオリは、私の親のこと、少しは知ってるよね。母はまあいいとして、父が問題だよ。納得しなければ、取っ組み合いでも殴り合いでもして、自分の考えは貫くからね」

「二人とも定職はないし、アーティストが集まる村どころか自分たちの住む所もままならないんだからさあ。ニートと言われてもしょうがないよ」

「でも、好きなんだね？」

「まあね」

セリフを忘れた女優が、それを思い出すくらいの間を置いてヨーコは言った。

「彼は……、私にはないものをもっているから」

窓に映る車内はアニメのセル画のようで、その向こうを街の灯が流れて行く。

駅を出て家に向かう途中、シオリを追い越して行った車がある。狭い路地をかなりの速度だった。

その時、シオリは風を切る音を聞いた。車体のそれではなく鞭の

ような感じで、被っていたニットキャップが脱げて飛ぶ。続いて違う種類の音がした。ギターの弦が切れた時のような音だった。

ニットキャップは数メートル先の道路標識に引っかかっていた。正確に言つと、ニットキャップにはワイヤーの輪が絡み、そのワイヤーが標識に巻き付いている。

ワイヤーをよく見ると、輪の部分は投げ縄のように作られていた。もし、あのワイヤーが自分の首にかかって、それを車で引っ張られていたら……？

シオリは悪寒を感じた。

■ Act 10 ■

「ユカ、今日は一緒にお出かけしようか」

日曜日の朝食は遅めだ。ダーリンは昼まで寝ているようだ、シオリは昨夜のうちに、このことは話してある。

ユカは、もちろん賛成で、スクランブルエッグを食べかけのまま立ち上がった。

「残さず食べないと連れてかないわよ」

「うん、でも、どこへ行くの？」

「フリマよ」

「フリマって何？」

「フリーマーケット。公園に、家で要らないけどまだ使えるものや手づくりのものなんかを持って行って売るのが」

ユカは歌でも歌いだしそうな様子で、踊るようにスクランブルエッグを食べ終えると、最後の一滴までのみ干すかのように、ミルクカップを口につけたまま、しばらくイナバウアーのような姿勢を保っていた。

「ごちそうさま。さあ、ママ、でかけようよ」

「まだまだ、着替えてからね」

今日は天気もまずまずだし、フリマ日和だなとシオリも何だかうきうきした気分になった。

「公園って、あたしがよく行く第3公園？」

「違うわ。電車に乗って行くの」

「わーい、電車だあ。それで、ママも何か売るの？」

「今日は売らないわ。お教室のエミさんがワイヤークラフトのお店を出すって言うから見に行くの」

シオリたちが都心にある公園に着いたのは昼過ぎだったが、フリマは、もうかなり賑わっていた。

地面にシートを敷いて、その上に貰ったもののもてあましているような贈答品や買ったもののほとんど使っていない不用品、古本、CD、ゲームソフトなどを並べている人たちもいれば、台や衝立を持ち込んだプロのような店もある。

ビクラフトやクレイアートやカントリードールなど自作のハンドメイド作品を売っているところも、いくつかあった。

ピアノを弾きながら歌う関西弁のジャズシンガーにちょっと似ているエミさんは、ポストカードや雑貨やアクセサリーを並べた横に座って、ワイヤーとペンチを手に実演していた。こういうのは人集めに、かなり効果があるようだ。

シオリとユカも、見物人の中に入って、しばらくエミさんの手並みを拝見していた。

実演が一段落して、エミさんはシオリたちに気がついたらしく、片手を挙げて微笑んだ。

「調子はどう？」

「そうねえ」

見ていく人は多いけどと言って、エミさんは鼻の上に皺を寄せた。「あまり儲けは期待しないって言っても、そうそう安くはできないしねえ。だけど、ペンスタンドやフラワーベース立てやガーデニングの品だったら、100円ショップでも、けっこういいものはあるしって、まあ、作った私だっと思うからねえ」

そう言って笑うとエミさんは行き来する人たちに声を掛けた。
「全部、ワイヤークラフトの手づくりです。いかがですかー」

「見るのはただですよー」

興味を示したらしい女子高生くらいの二人連れにポストカードを渡し、開いてみるよう促す。

カードを開くとワイヤーで作ったピエロが起き上がる。

「わー、面白い。友達に送ろう。これ、買います」

スーツを着た若い男が立ち止まった。

「こういうのって、資格はどうやって取るの？」

サラリーマンにしては言葉づかいが粗雑だが、まあ、仕事の時とは違うのかもしれない。

「え、資格ですかあ？」

「だって、資格がなければシロウトには、こういうの作れないし、商売をやれないじゃない？」

「資格がないと売ってはいけないんですか？」

エミさんは下を向いて苦笑し、顔を上げるとシオリに目配せした。困ったもんね、とか、この人ちょっと頭おかしいんじゃないの？とか、テレパシーを送っていたのだろう。

「世の中何でも資格だよ。そうでしょう？」

その男は少しの間、自分の言葉に自分で相槌を打ちながら何やら喋っていた。わりと常識的な内容だったのだと思うが、いや、むしろ、あまりにもありきたり過ぎたからか、こういうことだったか、シオリの記憶には残っていない。

「じゃあ、あなた、モグリでやってるの？」

男はまるで、自分の考えの正統性に少しの疑問ももち合わせてい

ないかのように平然と、エミさんに問いただしている。

「人聞きの悪いこと言いますねえ。どこがモグリなの？」

エミさんも、さすがに頭にきたようだった。

「資格を授けている教室も、どこかにあるらしいけど、そんなのは民間が勝手に作っている資格で権威などほとんどないし、もっていても、せいぜい何も知らない人を騙すくらいの役にしかたないんじゃない？」

追いつちをかけるようにエミさんは続ける。

「医者とか弁護士みたいな国家の資格なら別だけど、民間が金儲けのために作ってる資格なんて、ほとんど役に立たないわよ」

シオリはエミさんのご主人が司法書士だと聞いている。

男は言葉に詰まった。

「あなたもまあ、これだけの腕をもってるんだから、ちゃんと資格を取りなさいよ。資格を取れば、もっと儲かるし、いい人生を送れるよ」

男は一方的にまくしたてると、逃げるように立ち去った。

エミさんはやれやれという顔で、また、通る人に声を掛け始める。

店の前を、揃いのＴシャツの一团が通り過ぎて行く。短めのコートを着た中年の男が彼らに囲まれ、集団の中心にいた。まるで警官が犯人を連行するシーンのようだが、Ｔシャツと首から下げているＩＤカードから、このフリマのスタッフとわかる。会場の外へ向かっているようだった。

中年男は畳んだイーゼルとスケッチブックを小脇に抱え、布製の大きなバッグを引き摺るようにして歩いていった。

「あの人、今日は一人なんだ」

おそらく売れた商品を補充するためだろう。エミさんは巻かれたワイヤーを手取る。

「時々見かけるんだけど。本部に参加費を払わないで店を開くのよ。それで、退去させられるんだけど、たぶん、入口の外の路上で、また始めてるわね」

必要な長さのワイヤーをニツパーで切る。パチンという音が響いた。

「でも今日は、いつも一緒の人がいないわねえ」

「一緒の人？」

「並んで店を出す人よ。ワイヤークラフトをやってるんだけど」

エミさんは少し首を傾げたてから言った。

「自称元祖ヒッピーの針金細工師とかいう人だけど、シオリは知らないだろうねえ。あんなホームレスみたいなおじさん」

シオリはユカを連れてフリマの会場を一回りした。なかなかの味のオリジナルスイーツとフレーバーティーを味わって、エミさんの店に戻ると、もう日も傾いている時間になっていて、行き交う人の数も一段落している。

店の前に女の子を連れた女性が立ち止まった。親子だろう。顔や手の皮膚が乾いた感じの母親は、子供に何か促している。

自分の陰に隠れている子供を前に押し出し、もう一度「さあ」と促した。

小学校中学年くらいの女の子が気に染まない行動を迫られているのは、その表情でわかる。

「あとう」

女の子がおずおずと口を開くと、母親はその後から両肩に手を置く。

「私はお金がありませんのですが、このネックレスが気に入ったので、１００円で売ってください」

女の子は、まるで、本を棒読みするように言った。母親から言い渡されたセリフかもしれない。

シオリは女の子が指差したネックレスを見た。３０００円の値札がついている。

ワイヤーに通してあるベネチアンビーズが午後の陽光を受けてきらめいた。

女の子は喋り終わると恥ずかしそうに視線を逸らした。母親はエミさんの表情を注視している。

「これは３０００円の品で、１００円だと材料費にもならないんですけど」

「ほら、もう一度」と母親が促し、少女はさっきのセリフを録音の再生のように繰り返した。

「私は欲しいんです。そうでしょう」母親がつけ足し、女の子は頷く。

「１００円では赤字ですからねえ」

「駄目なの？」

エミさんの答に、今度は母親が威圧するように念を押した。

「ええ」

「売ってくれば子供が喜ぶでしょう？　あなたは好きで作ってる

んだし、いくらでもいいじゃないの」

ユカはずっと無表情で、その様子を見ている。と言っても、何も考えていないわけではないだろう。シオリは彼女の頭の中で多くの思念が生まれ、行き来しているような気もした。

「マサミちゃん。このおばさん、売ってくれないって」

母親の言葉に女の子は悲しげな表情をしたが、それは、目当ての物が買えなかったからより、母親が変な要求をして済まないという気持ちからのように、シオリには見えた。

「売ってくれないから、さあ、帰ろう」

二人の背中が遠ざかる。特に未練がましい様子は見えなかった。

「世の中には、ああいう人、けっこういるのよね」

エミさんの言葉は、そんな必要がないのに弁解しているように聞こえないでもない。

シオリはその時、幼児期に虐待を受けた子供が成長してして親になると、その子供に自分が受けたような仕打ちを繰り返す連鎖の話を思い浮かべた。

もちろん、あの子が将来、親と同じような大人になるのかどうかなど、わからない。

■ A c t 1 1 ■

日もだいぶ傾いたところで、エミさんは店じまいした。台やパネルなどは一緒に店をやっていた妹さんが用意したもので、それは彼女が車で持って帰る。飲酒運転になるのはまずいので、打ち上げは日を改めてということになるそうだ。

エミさんは、今日の売上がまあまあだったからシオリたちに夕食をご馳走してくれると言った。

儲かったといっても、製作に要した手間などがシオリには推測できるし、それにエミさんは、商品の説明をしたり値切りに対して駆け引きしたり実演したり、時には世間話に口を合わせたり、その甲斐あって売上げが上がったのだ。

エミさんの作品はけっしてレベルが低いわけではないが、ものが売れるのは商品の良し悪し以外の、接客によるところが大きいのは、今日一日、見ていて、シオリにもわかってきていた。

でもまあ、今日はエミさんのお言葉に甘えることにする。

撤収しかけている古着屋の前を通ると、出展者の中年女性は電卓を手に、売上と残りの数が合わないと騒いでいる。十数着ほど万引きされたらしい。

「あんなの、よくあることよ」とエミさんは言った。

「うちは、たいしたことなかったけど、店によっては、いつも、たいへんらしいわ」

「あ、やっぱり、ここでやってるわ」

公園を出たところでエミさんがシオリに身体を寄せ小さな声で言った。

「図々しい人なんだから、まったく」

先ほど、フリマのスタッフに退去させられた中年男は、こちらで似顔絵描きの店を開いていた。ここはフリマの圏外だからスタッフに文句を言われることもないのだろう。路上だから警察に規制されることはありそうだが、大丈夫のようだった。まあ、警察もいろいろ忙しいから、小さいことにかまってはられないだろう

客はいなくて、男は折り畳みの小さな椅子に腰掛けて、手にした鉛筆を玩んでいた。立てたイーゼルのあちこちに鉛筆で描いた何枚かの似顔絵をクリップで留めてある。

「おつかれさまでーす」

エミさんは、まるでお面を付け替えるように一瞬で表情を笑顔に変えると、声を掛けた。

「ああ、もう上がったんですか。僕はもうちょっとだねえ。中では2時間で10枚描いたから、まあまあだったんだが、ああいう具合にケチがついちまって、こっちに来てからはさっぱりだ」

似顔絵書きは日に焼けた顔をしている。商売柄、外にすることが多いからだろうか。

「それなら、参加費を払ったほうがよかったかもですね」

「シヨバ代なんか払わんよ」

彼は毅然として言った。

「いいかい、ここはみんなの公園じゃないか。公園というのは人々がちよつと休んだり、木や花を見て和んだり、散歩したり、そーい

うのを楽しむ場所で、もちろん金を取ったりはしない。これは世界的な常識だよ。あのフリマの主宰者は何の権利があって参加者から金を取るんだ。そんなのはヤクザのやることと同じじゃないか。ま、僕はお金を貰って絵を描くから、それを営業といえないことはないが、でも、けっきょくは人々の心を和ませる文化事業をやってるんだよ。ま、金を取るのに文句を言う人があるかもしれないが、この歳になって他にどんな仕事をしろというんだ。行政が紹介してくれるのかい？　僕は福祉の世話にもならず自分の稼ぎで生きてるんだからねえ。シヨバ代なんて絶対払わないよ」

まあ、世の中には、ふつうに考えたら変なところに奇妙な拘りをもっている人たちもいるのだ、と思いながら、シオリは彼が捲くし立てるのを聞いていた。

ユカは唾を飛ばしながら喋る似顔絵描きには無関心の様子でイーゼルの絵を眺めていたが、ただ黙っているのにも飽きたのか、誰にともなく呟き始めた。

「これ、この人が描いたの？　あ、この倅田クミは写真みたいだ。こっちは香取シンゴ君なのかなあ？　あんまり似てないや」

「お嬢ちゃん、これ、誰だか知ってる？」

彼はイーゼルの上の方の一枚を指差したが、ユカは首を傾げている。

「天地マリちゃん……、といっても、もう、こんな子は知らないんだろうねえ」

「マリちゃん」

「そう、マリちゃん。でも、もう、そちらのお嬢さんたちだって知らないわな」

名前くらいだが、数十年前に天地マリというアイドルがいたのをシオリもいちおう知っていた。

彼はシオリとエミさんのほうに顔を向けて笑った。

「ほら、みのもんたが、よく言うだろう？　しわくちやのババアにもお嬢さんだとかさあ。それに比べれば、あななたたちなんて、立派なお嬢さんだ」

みのもんたの話題がでたから、この人の時間は数十年前からずっと止まっているというわけでもないようだ。

似顔絵描きは顔をほころばせてユカの様子を見ている。本心からなのか、それとも営業用の笑顔なのか、シオリには判断がつかなかった。意識はしていないが、商売人の習性として身についてしまったものかもしれない。

シオリはイーゼルの絵に目をやった。だいたいが有名人のようだが、その中で老人の横顔と子供のはたぶん違うだろう。一応うまく描けているから、自信作をサンプルとして見せているのだろうか。

シオリはふと思いついた。

「ユカ、描いてもらったら？」

「え、あたしの顔を？　でも、前に、ヨーコお姉ちゃんが描いてくれたよ」

「それとはまた違うんだから」

シオリは「いいよね？」とエミさんの了承を得てから、イーゼルの下部の横板に張ってある紙片に“一枚1000円”と書いてあるのを確かめ、紙幣を取り出した。

似顔絵書きは、シオリから千円札を受け取ると、それを左手に持ち替え、右手を上着のポケットに入れた。十数枚くらいの紙幣を取り出して、左手の千円札をその中に混ぜる。そのついでのように指

を舐めて紙幣を数えた。

ポケットに戻すと、シオリとユカに照れたような笑顔を見せる。

それから、ユカを折り畳み椅子に座らせ、スケッチブックを開いて描き始めた。

「おじさん、どのくらい前から絵を書いているの？」

「そうだねえ。もう、何十年も経ってしまったなあ。ずっと、この道一筋だがねえ」

たしかに手馴れた感じで、ヨーコより鉛筆の動く速度が速い。

ユカは、まるで美容院に行った時みたいに、あまり動いたり表情を変えたりしないよう意識しているかに見える。

「ママ、今度、ワイヤークラフトで、この絵を飾るピクチャーフレームを作ってね。前に作って写真を入れたのがあったでしょう。あれの、もっと大きいの」

「ほう、お嬢さんは針金をやってるのかい？ ああ、そちらのお嬢さんもそうだったね」

真剣な表情で、目は絶え間なくユカの顔と紙面を行ったり来たりさせながら似顔絵描きは言った。

「針金と言えば、やつこさんは、どうしてるのかなあ？」

彼はぼそりと言ったが、それは、いつも並んで店を出している針金細工師のことではないだろうか？

シオリは、そのことに興味があつたのだが、その時、彼は絵に集中し始めた様子で言葉数も少なくなっていたから質問するのは躊躇われた。

彼は絵とユカの顔を何度も見比べて何ヶ所かに鉛筆を走らせた。

絵をかざしてじつと見る。どうやら描きあがったようだ。

「お嬢ちゃん、お名前は？」

「ユカ」

「ユカちゃんか。はい、できたよ」

彼は完成した絵をスケッチブックから破り取ると、左上に“ユカちゃん”と書き入れ、右下に日付と何か模様のようなものを記してユカに手渡す。一緒に眺めた後、右下を指差して説明した。

「あ、これは僕のサイン。そのうち僕が有名になったら、この絵の価値は、そうだな、まあ1億くらいにはなるだろうね」

「何て書いてあるの？」

ユカが尋ねた。シオリにも、どういう字が書いてあるのかわからない。

「ああ、それは僕の名前だけど、ちょっと読めないように書いてあるよ。いずれ、僕が有名になった時にわかるから。そうだなあ、ユカちゃんがお嫁に行く時は、これを売れば1億円の持参金になるかもしれないよ」

「本当？」

ユカが目丸くして尋ねた。

「ま、そつゝい夢を売つてるといふことだね。何といつても僕らは夢を売る商売だからねえ」

ユカは何だか不満そつゝな表情で似顔絵をシオリの方に向けた。ヨ―コのデッサンと比べると出来映えはいまいちな感じだった。

「ちよつと失礼」と断つてから、彼は背後においてあつたバッグのファスナーを開け、琥珀色の液体が入つたボトルを取り出した。ラベルで、それがカティーサークだとわかる。

「もう、仕事は終わつたし、ま、いいだろう。僕はプロだから、仕事中は絶対やらないんだけど」

彼は栓を捻り、口につけたボトルを一瞬持ち上げて、ウイスキー

を喉に流し込んだ。

「ああ、そういさつきはちょっと針金細工師のことを考えてたんだっただ」

もう、絵は描き上がったのだが、彼はまだ話し足りないように見え、それで、シオリたちも何だか、そのまま立ち去り難い気持ちにさせられていた。でも、どうやら興味を引かれる話が始まりそうな雲行きになってきた。

「ここへは、よく、奴と来て、並んで商売してたんだ。いや、それで、この前も今日は来るようなこと、言ってたんだよ。まあ、あいつには連絡のしようもないから」

似顔絵書きは、また、ボトルからホワイトホースを一口あおった。アルコールで赤みが差したためだろうか、童顔なのだが、よく見ると皮膚のつやは褪せ、細かい皺に覆われているのに気づく。

「やつこさんは住所不定だしね。新宿や隅田川の脇にダンボールの家を作ったり、時にはそこらの軒下で寝たり、友達や知り合いのところに押しかけて一夜の宿を頼んだり……」

彼はボトルのキャップを玩んでから言った。

「もつとも、僕のアパートの部屋には電話がないし、今時の携帯なんてのも持つちやいないから、向こうにしても、ちよつと連絡をとはいかないわけだがねえ。ははは。まあ、NTTに払う金があつたらアルコールの方に行ってしまうて、どうせ止められちゃうんだから、最初から引かないんだが」

電話も携帯もないなんて、今時、そんな人がいるんだ、とシオリは少々驚いた。何だか、そんな状況で生きているのが不思議に思える。

「考えてみると、あいつとは、もう、長い付き合いだ」

彼は手にしたボトルに目をやった。もう一口飲もうかどうか迷っていたようだが、そのまま話を続ける。

「昔はよく旅をしたものだが、行く先々で、奴とはよく会ったねえ。京都、倉敷、博多、鹿児島。それから、北の方も行った。仙台、盛岡、青森、札幌……」

指を折りながら、彼は地名を挙げた。

「そちらのお嬢さんは、やつこさんのこと知ってるよね？」と、エミさんに質問していることを手で示す。

「ああ、その旅をした話は本当なんですか？　ちょっと話したただけだけど、あの人のいうことは何かみんな胡散臭いので、はたして本当かなと思ってたんですよ。何でも日本で最初のヒッピーで、ワイヤークラフトを始めた人だとか……」

「旅の話は本当だよ。奴のことだから多少かなりか粉飾決算はしてるだろうけど」

そう言って笑うと、それから彼は何度もボトルを口に運びながら、昔話をしばらく喋った。

針金細工師はヒッピーなんてしやれたもんじゃなくて、その昔、フーテンと言われてた連中の一人だとか。フーテンといっても寅さんではなく、それは、もう死んでしまった永島慎二という漫画家が新宿にたむろしていた家出少年少女を描いた『フーテン』という作品からきている言葉だろうとか、マスコミに取り上げられたりして連中はあちらのヒッピーの格好を真似するようになったとか、だいたい、そのような話だった。

「僕らのような人間はボヘミアンというんだが、まあ、行動なんかはちよつと見ると似てるかもしれないねえ。でも、フーテンってのはヒッピーとか、僕らのようなボヘミアンみたいに芯の通った思想

を持ってたわけじゃないし、だから、いつの間にか、みんなどこかへ消えちまってたよ」

彼は話を続けた。

「でもまあ、あの頃、やつこさんたちはけっこう稼いでたなあ。一日の売上は何万もあつたみたいだ。ふつうのサラリーマンの月給は10万もなかった時代だから、濡れ手に泡だね」

ここで、下手な俳優のように大仰に声を潜める。

「でも、僕はまあちよつと内情を知ってるんだが、パーツてのを仕入れてきて、それを売って儲けたのさ。問屋からペンダントの先っちょとか鎖とか、そんなのを二束三文でね」

エミさんが頷いた。

「私も、この間、浅草橋の問屋街に行つて9ピンやチェーンやイヤリングの金具を仕入れたわ」

9ピンというのは機会で既に片方に輪を作つてあるピンだ。中にビーズなどを入れて、もう片方の輪を作つて繋ぐぎ、ペンダントやブレスレットにしたりするのだが、大量に作る時は手間が省けて便利だ。

シオリもその問屋には行つたことがあるから、話がどんなものかよくわかつた。

「それをこれは手づくりでございますみたいな顔をして並べると飛ぶように売れる。原価は僅かなもんだからばる儲けさ。奴が売つたもので、実際に手づくりつていたものは名前のバッヂくらいかな。あれは、なかなか売れてたけどね」

似顔絵より儲かりそうだから、やってみようかと思つたが、どうもうまうまいかなかったそうだ。たしかに、ワイヤークラフトは人によつて向き不向きがあり、ほとんど独学でどんどん上達する人もあれば、教えられてもできない場合もある。

「奴にも、僕には絵心があるからできるなんて薦められたんだけど

ね」

もう夕闇が迫っていた。客が来る様子もなく一定の間隔でカティ―サークのボトルを口に運んだから、かなりアルコールが回ってきただろう。

話の続きは所々でちよつと怪しい呂律になった。

「そついうわけで、奴は金も持ってたし、行く先々で、客はたいてい若い女の子だし、そっちの方もやり放題だったね。それで、一時はちよつとした金ができて、喫茶店開業したんだ。どこか、中央線の沿線の方だったと思っただけ。でも、1年くらいで潰れたみたいだ。けつきよく、あぶく銭は残りやしないんだよ。悪銭身につかずっていうだろう?」

そして、僕はずつと清貧の生活だよ、とそこだけはしっかりした口調で付け加えた。

「やつこさん、最近をよく、自殺を考えてるとか、まとまった金が入るなら人殺しでもなんでもやるとか言ってたなあ。そんな度胸はないくせに」

彼は腕の時計に目をやった。

「何だか長いこと喋っちゃったけど、こんな酔っ払いが近くにいると、お嬢ちゃんが恐がるねえ。僕ももう店じまいするよ。いやあ、ありがとうございました。それでは、お元気で」

「じゃあ行こうか」

エミさんが言うと、ユカがバイバイと手を振る。

しばらく行ってから振り返ると、彼はイーゼルから絵を外していた。

■ Act 12 ■

F Mラジオで正午のニュースが終わった。

<今日はあいにくのお天気ですが、皆さん、元気にやってますか？
アフタヌーンメモリー、毎週月曜日のお相手は西条佳織です>
第1曲目はカーペンターズだった。『Rainy Days and Mondays』。古い洋楽だが、今日の雰囲気に合わせて悪くない。

オーブントースターからピザトーストが焼けたという合図がある。
キッチンへ取りに行くとコーヒーの香りがして、パーコレーターも仕事を完了していた。

リビングに戻ると、カーペンターズはフェイドアウトして、CMが入る。

シオリはフローリングの床に置いたマットに腰を下ろし、ピザトーストを一口食べた。

<さて、本日のお客さまは、来月の10日にデビューシングルをリリースされるシンガーソングライター、城崎ケンジさんです。城崎さん、アフタヌーンメモリーによろこそ>

<皆さん、こんにちは。そして、西条さん、はじめまして。城崎ケンジです>

<城崎さんは東京都内のある町で、長い間、ストリートミュージシャンをされていたそうですね>

<はい、そうです>

<メジャーデビューのきっかけはどんなことだったんですか？やはり、ストリートで歌っていた時にスカウトされたとか……？>
<いえ、僕の場合は、自主製作したCDをですね>

< ああ、いわゆるインディーズですね >

< はい。まあ、それを、たまたま聞いたレコード会社の方から、やってみないかとお誘いがありました >

< その時は、どんなお気持ちでした？ >

< いやあ、天にも上るような気持ちとは、あのことですね。なにしろ長年の夢が叶ったんですから >

< 城崎さんは、宮崎県の高校を中退後、ミュージシャンを目指して東京に出られ、アルバイトをしながらストリートで歌ってこられたんですね。デビューが決まって、周りの人の反応はどうですか？ >
< 僕が歌っていた町の人たちも、ストリートミュージシャンの仲間たちも、揃って応援してくれていますよ >

ヨーコの彼もストリートミュージシャンだった。ピートと紹介されたが、この間もストリートで演奏していたし、たぶん、今、出演している城崎某とは別人だろう。

しかし、とシオリは思った。

ちよつと会っただけだからピートがどんな人間か、よくわかっていないし、正直言つて、今のところ、それほど肩入れする気にもなれないな。

< それでは、来月10日リリースのデビュー曲を城崎さんから紹介してください >

< はい、城崎ケンジで『君のしあわせ』です。よろしく願いします。 >

イントロが流れ出した時、電話のコールが聞こえた。

「ユカちゃんのお母さんですか。なかよし幼稚園の坂下です」

「あ、先生ですか。いつもお世話になっております」

坂下先生の声は何となく暗い感じがした。

ユカは今、幼稚園にいるはずだ。何故、電話があるんだろう？
怪我でもしたのかしら？

シオリは次の言葉を待った。その数秒間は、自分の身体の中に生じた、比重の高い空気が降りて行くような感覚を観察しているしかない。

「実はですね」

坂下先生は、すぐに話し出さない。

何から話していいのか決めてなくて、順序を確認しているのだろうか？

シオリは唾を飲みこんで、次の言葉を待った。

「先ほど男性の方からこちらに電話がありまして、ユカちゃんのお母様が交通事故で病院に運ばれたと申されるんです。それで、迎えに行くからと。でも、こうして電話に出られてるんですから、そんなことはございませんよね」

「はい。事故なんてことはありません。それで、どういつ方から電話があつたんですか？」

「先方は名前をおっしゃらなくて、ユカちゃんを電話に出してくれれば、ユカちゃんにも声でわかる方と代わるからと」

「ユカは携帯を持ってるんですが、そちらにかけることはなかったんですか？」

「はい、ユカちゃんの携帯のことを話しましたら、向こうは番号を教えてくれと言いいまして、私が何だかおかしいなと思っっているうちに切れてしまったんです。公衆電話からでした」

「ユカは今、そちらにいるんですか？」

「はい、今は休み時間ですが、園児全員に運動場へは出ないで、建物の中で遊ぶように言っておりますので、ユカちゃんもそうしています。別にお変わりはありません」

坂下先生は、だいぶ緊張が解けた様子だったが、更に話を続けた。「それで、万一のことがあってはなんですので、ユカちゃんがバスを降りるところまで、どなたか迎えに来ていただけないでしょうか？ご都合がつかなければ、当方の誰かが家までお送りしますが」

「それでは、私が参ります」

「そうですか、ありがとうございます。いつもの時間ですので、よろしく」

ユカが対象として選ばれたのはどうしてだろう？ シオリの胸にこんな疑問が沸いた。悪戯なのか本当の悪意をもっているのかはわからないが、相手は、名簿などを手に入れ、そこからランダムに抽出したのだろうか？

坂下先生の声がシオリの思考を遮った。

「今はこんな世の中で、何が起きるかわかりませんから気をつけてくださいね。こちらで、いちおう警察にも連絡しておきますから」
電話は終わった。

ユカはGPS携帯を持っているから、シオリはPCで現在位置を確認した。幼稚園の中にいるからひとまず安心だ。

そろそろ幼稚園のバスがユカを運んでくる時間になるので、シオリは迎えに行くことにする。

途中で先日、ヨーコと会った帰りに不審な車に抜かれた場所を通る。標識には、あの時のワイヤーが引つかかったままだった。

あの時は、かなりアルコールが回っていて、どのような状況だったか詳しいところまではわからないし、危害を加えられそうになったのかどうかだって定かではない。実害を受けたわけではないから警察に通報もしていなかったのだ。

駐車禁止のマークが描かれた円形の金属板の下、時間帯を表示した長方形の部分に銀色の金属線が絡んでぶら下がっている。

太さは0.9ミリくらいだろうか。見た感じ、一般に使われることの多いユニクロ線ではない。触って曲げてみると、アルミワイヤーのような柔かいものでもなかった。

シオリはワイヤーを標識から外し、小さくまとめてポシエットに入れた。

その夜、一人の時間が来ると、シオリは例のワイヤーを取り出し、自分もっているワイヤーと比較してみた。

似たような銀色でも、並べるとそこに微妙な違いがあるのがわかる。やはり、ユニクロ線やアルミではないようだ。もちろん、銅や真鍮など、色が明らかに違うワイヤーでもない。ビニールのコーティングがあるワイヤーだと、中にあるのはユニクロ線あるいはスチールだから、被覆を剥がしたものでもないだろう。

銀線と似ているように思えた。純銀より純度1000分の925の方がかなり近い色をしている。

だが、曲げて見ると、1000分の925の銀は少し硬めだ。シ

オリがもってきたワイヤーを曲げる時の感じは真鍮線に近かった。

今、家にあるワイヤーだと、だいたい、こんなものだ。

他の素材について考えるうち、シオリは以前、お教室で話題に出た洋白という合金のことを思い出した。

■ Act 13 ■

シオリが買物を終えて、ショッピングセンターを出た時、携帯が鳴った。

「はい」

番号を確かめたが、記憶にない。

相手が話し始めるまで、しばらく間があったが、無言電話ではない。

シオリは携帯の場合、受けても名乗らないことにしているが、相手は自分かどうか確認している。

男ではないが、随分ひからびた声だった。

「こころなしか電話が遠いが、向こうが小声で話しているのかもしれない。」

「私、川口です。川口加寿子。秋島先生のお葬式の日、帰りの電車の中でお話しましたね。覚えてますか？」

「はい」

川口加寿子とは名刺を交換したんだっただ。彼女のは保険の営業用で、たしか淡色だったような記憶があるとシオリは思った。

「ああ、よかった」

「その節は失礼しました」

「いちおう、無難に慣用句を言うておく。」

「私のことは、もう、堤さんが話されていると思いますが」

「いえ、堤さんからはなにも聞いておりませんが、インターネットで見ました」

「ああ、インターネットね」

いまいましてうな口調だった。巨大掲示板で盗作者として実名を晒されたことは、たぶん、知っているのだろう。その後も、欲求不満解消の場を求める連中の格好のスケープゴートにされて、さんざん叩かれ、手芸・クラフト板では有名人になってしまったようだ。

「でも」

気を取り直したように川口加寿子は言葉を継いだ。

「秋島先生は、穏便に処理しようと配慮してくださったんですよ。ホームページの抗議文も雑誌の記事についてだけで、私の名前は出さないでくださいましたし、私は感謝してるんですよ」

なんだか必死で、それは滑稽に思えるくらいだ。まるで裁判官の前で弁明する被告人のようだとシオリは思った。

「本当にいい方でした。ですから、あの時は、とても顔を出せたものではないですけど、お線香を一本あげさせていただきに行ったのです。社員旅行に行っていたのでお通夜には間に合いませんでした」

「はあ」

彼女の弁解は続いたが、別にそんなことを自分に言っても仕方ない。シオリは、ちよつとしらけた気分になった。心ここにあらずという感じで、携帯をただ耳に当てている。

「それで、そちらからは、私の方にお電話などいただいてませんよね。私が出ると、すぐ切れてしまったりするようなのは」

シオリには何の事かよくわからなかった。でも、彼女は、このことを聞きたくて、電話してきたのかもしれない。

「あたしは、かけてませんよ」

「お教室の生徒さんの間で、私の話が出たりということは……？」

「さあ、最近は、皆さんとも、あまりお会いしてないので、でも、そついうことは聞きませんよ」

そう言ってから、エミさんとフリマで会ったことが頭に浮かんだが、そういう話をしたわけではないから、まあいいだろう。

しばらく間があった。

次の言葉を考えているようにも、質問したい事はあるのだが言うのを躊躇っているようにも思えた。

「どうも、お忙しいところをごめんなさいね。それじゃ、失礼しました」

急に早口でそう言うと、川口加寿子は電話を切った。

駐車場まで来て、車のキーを取り出した時、また携帯が鳴る。

「はい」

非通知だ。

「俺だよ」

ボイススクランブラーの声だ。こういうのは以前にもかかってきたことがあったが、同じ人物かどうかはわからない。

「どなたですか？」

「ワイヤー……」

「え？」

短い笑い声を聞いたような気がした。
すぐに電話は切れた。

■ Act 14 ■

シオリは洋白線について、誰かに聞いてみようと思った。

エミさんには先日のフリマの後、ご馳走になっっていて、一言お礼をと思っていたから、それを兼ねて電話することにした。

「エミさんですか？ シオリです」

「あ、シオリさん？ こんにちは」

「この間は、ごちそうさまでした」

「いえいえ、たいしたことはできなくて。だけど、よかったら次回も見に来てよね。儲かったら、また行こうね」

「でも、儲かったらって、それは一日パートなんかよりは、はるかに多いお金が入るでしょうけど、あたしは作る手間がどれくらいかかるかわかってるから、なんだか心苦しいわ。」

「いいのよ、あれは、お祭りなんだから」

「お祭り？」

「そう。作る時間とか計算したら時給いくらにもならないわけだけど、とにかく自分の作品にお金を出してくれる人がいて、それから、不特定多数の人とお喋りしたり、値段の駆け引きをやったり、打ち上げに行ったり。まあ、この間みたいな、ちよっとビョーキ気味の人も来るけどさ」

「あれは、あたしも焦りました」

シオリは苦笑したが、それは電話で届いただろうか？

「でも、中には気に入ったからって1万円札出して、お釣りはいらないうって人もいたね。そんなことより、まあとにかく、お祭り騒ぎを楽しめれば、それでいいんだけど」

「利益はなくても楽しめる方が、いいかもしれませんね」

「そうよ。今時、手づくりで金儲けしようなんて思ったら大間違い。作ったものを安く買い叩いて右から左へ流し、マージンを取るのが利口なやり方。コツコツ作ってたって、そういうせこい連中を儲けさせてやるだけで、得るものといえば、いいとこ自己満足くらいだわ」

エミさんは続けた。

「それに、ここだけの話だけど、お金だったら、最近、デイトレードがうまく行ってるから、そっちの方がよっぽど儲かるわ。資本主義の世の中ではなんと言ってもこちらには叶わないわね。でも、だからと言ってハンドメイドの方もお金をいただくんだから、いいかげんなことはしてないつもりよ。私なりに、いいものを作ろうとがんばってはいるの。それでこそ楽しいんだし」

話が一段落したようなので、シオリは自分の質問を持ち出してもいいかなと思った。

「ところで、ちょっと教えていただきたいんですけど、洋白線で、どこに行けば売ってるかなあ」

「洋白線？ シルバーみたいな色をしたやつだったっけ？」

「ホームセンターなんかじゃ、まず、見かけないんだけど」

「ああ、それなら、山銅商店にあったよ」

山銅商店は下町にある伸銅品の問屋だ。少量でも小売してくれることが、ワイヤー作家たちにクチコミで知られている。

「山銅商店ですか。あそこなら行ったことあります」

地下鉄の駅から地上に上がって気づくのは、そこにある何かが乗車駅の辺りにあった街の喧騒と違うことだ。

向こうでは世界がさまざまな音に厚く塗りたくられていたのだが、

ここでは、常に通奏低音として鳴り続けている静けさのような存在を感じる気がする。大通りにはそこそこの車の通行があるのだが、この違いはどこからきているのだろうとシオリは思った。

あるいは、それが下町の情緒というものなのかもしれないが、成分も少し違っていきそうな空気の中で、秋の弱まってきた陽光が照らし出す、どこことなく古びた土地は、何となく心もとない。

シオリは、前に来た時に見覚えのある街並みを辿り、歩いて行く。

ワイヤーには、いろいろ種類があるが、さまざまな用途によく使われるので見掛けることの多いユニクロ線は、ワイヤークラフトではあまり好まれない。見た目が安っぽかったり、表面が錆びたり変色しやすいからだろうが、初心者が練習の時から、特別この素材に拘りをもっている作家が用いるくらいだろう。

銅線は、やや高級感があり、適当な硬さや曲げやすさなのだが、緑青が出るためか敬遠されがちのようだ。ゴールドに似た色の真鍮線は、比較的作りやすく、出来映えも格調高く見えるし、特に技術の高い人たちに好まれる傾向がある。

ビニールでコーティングされたワイヤーは、綺麗な色をしていてポップな雰囲気が出るので、最近流行りのインテリア雑貨系に向いている。ワイヤークラフト用に作りやすさや美しさを考えた製品も出ている。

メタリックカラーの焼付塗装をしたアルミワイヤーも同様に人気があるようだ。

洋白線は、以前、お教室で見たことがあった。

生徒の誰かが、真鍮線みたいな感じで銀色の素材はないかと質問していた。銀線だと、やり直して無駄にしてしまうが勿体無いからというのだ。

シオリもそうだが、ワイヤークラフトでは、あらかじめ図面を書かず、頭の中で考えながら直接作っていく人も多い。そういう場合、うまくいかなかったり気に入らないと、そこまでやめてしまつて、また最初から作るわけだが、それだと一度や二度の繰り返しでは済まなかったりする。

その時、先生が、洋白線というのを教えてくれたのだった。シオリも少しいただいて簡単な形を作ってみたりした。硬さや曲がり具合は真鍮線に、わりと似ていた。

ジュエリーでよく使われる純度925/1000のシルバーと色が似ている。

でも、素材として、それほどポピュラーではないらしい。

シオリは、山銅商店の前に着いた。

見覚えがある店の正面看板は、真中に大きく赤い字で“銅”と書かれ、周りの空白の隅に、申し訳程度ほど小さく、店名や電話番号が記されている。

「はい、いらつしゃい。まいど」

店先で中を眺めていると、かなり頭部の薄くなった高齢の主人が声を掛けてきた。かなり前、2・3回来ただけなのに、シオリの顔を覚えているらしい。

「あのう、こちらには洋白線つてありますか？」

「はい、ありますよ。太さはどれくらいなの？」

「0・9ミリがあれば、それを」

主人は、奥から輪状に巻いたいたかなりの量のワイヤーワイヤーを持って来た。

銀色だがユニクロ線とは色合いが違っていて銀線に近い。

若い男性の店員が出てきて、主人に太さを聞いてからマイクロメーターで確認した。

「どのくらい要るの？」

シオリは、前に真鍮線を買った時と同じに、輪の一部を指で摘んで示した。問屋なのに余り少ないのは悪いので多めにしたが、別にそういう事はどうでもいいのだそう。

店員は目方を量ってから計算した代金を受け取り、奥の事務机で納品書と領収書を書いている。

シオリは主人に尋ねた。

「洋銀っていうのも同じような色ですよ。そのワイヤーはないかしら？」

昔の友達でプラスバンドをやっていた子がいたが、持っていたフルートを、たしか洋銀製と言っていたからだ

「ええと、洋銀ねえ。あつたかなあ」

主人は、目をほとんど閉じるくらい細めて考えていた。

領収書をもって出てきた店員が言った。

「社長、洋銀と洋白は同じですよ。ニッケルシルバーとも言います」

主人は、手を打ってから、ちょっと大げさな照れ笑いをした。

「ああそつだ。同じだった。最近ポケちゃってもの忘れが多いんだよ」

帰りがけに主人がこんなことを言ったので、シオリは足を止めた。「最近、あんたたちのやってる針金……、じゃなくて、ほら、ハ

イカラな言葉で何つつたつけ？」

「ワイヤークラフトですか？」

「そうそう、そのクラフトが、けっこう流行ってるみたいだねえ」

「あれ、そうですか？」

「こないだも、若い女の子が来てたよ。そうだな、歳はあんたと同じくらいかな。ま、あんたの歳が幾つかは知らないんだがね」

「今度、本を出したり、教えたりするって言ってたなあ。ええと、かあちゃんスクールだったか」

「カルチャースクールですか？」

「そうそう、そんなやつだよ。おれは、どうも進駐軍の言葉は苦手だねえ。まあ、ギブ・ミー・チョコレートは覚えただよ。知ってるかい？終戦直後、アメリカの兵隊さんにこう言つと、ジープの上からチョコやガムを投げてくれたもんだ。ギブ・ミー・チョコレート、ギブ・ミー・チューインガムってね」

主人の滑るような口調は、まるで落語家のようなだった。こういうのを江戸弁と言っただろうか。天然記念物にしていいくらいだなとシオリは思った。

「一緒に来てたのは、そのカルチャーだったか出版社だったか、そういうところの人だったかなあ。ああ、その時、名刺を貰ったんだっ
た」

主人は事務机の引出しを開けて、しばらく探していたが、やがて目当てのものが見つかったらしく、「これだこれだ」と高く掲げながら持ってくる。

シオリは手渡された名刺の文字を目をやった。

株式会社ガイアフレンズ 企画製作部プロデューサー 小柳 博人

「こいつにちよつと聞いたんだが、そのカルチャーてのは、何かいろいろ教えてくれるところかい？」

「ええ、手芸とか絵とか、楽器なんかも」

「ああそうか。そういえば、あの人はギターを持ってたよなあ」

主人は“人”の“ひ”の発音が“し”に聞こえる。

問いかけられて店員は頷いた。

シオリは帰ってから、洋白線と例のワイヤーを比較してみた。汚れを取ると色はほとんど同じだ。ペンチで曲げても感触がひじょうに似ている。しおりは、たぶん同じものだという結論に達した。これ以上確かめるは専門的な分析といったものが必要になるのだろう。

洋白について、ネットで検索して調べると、だいたい以下のようなことになった。

洋白は、洋銀、ニッケルシルバー、ジャーマンシルバーとも呼ばれ、銅と亜鉛、ニッケルから構成される合金である。

引張り強さなどの機械的性質においては黄銅より優れ、耐変色性に優れている。

古くから装飾品や洋食器に使われ、今日では水晶発振子ケース等の電子部材、電気抵抗線、バネ材料、フルートを主とする楽器や硬貨の材料に用いられている。

ランプシェイドのオークションは、すでに終了したらしく、アク

セスすることはできない。だが、坊城小百合やガイアフレンズなどのキーワードを加えて検索したら、キャッシュに残っていたページを見ることができた。

ニッケルシルバー
出品物の素材は“洋銀”となっている。

■ Act 15 ■

携帯が鳴った。

ボイススクランブラーのおかしな電話が何度もかかってくるから、好きで選んだ着メロが、いつの間にか忌まわしい響きに変わってしまっている。

これは、大学の一般教養で習った条件反射とか刷り込みとかいうやつだろうか？

シオリは携帯を開いた。

番号に記憶があるような気もするが、誰かを特定できない。耳に当てて、とりあえず返事をした。

「はい」

「あのう」

女性だが、知らない声だ。

「すみません、どちらさまでしょうか？」

「そちらさまは川口加寿子のお知り合いの方ですか？」

「ええ、まあ。あまり深いおつきあいではありませんが」

そういえば、番号は川口加寿子からかかってきた時のだったかもしれない。

「失礼いたしました。わたくし、川口加寿子の妹で小山内加奈子と申します。私は結婚しておりますので名字が違っております。姉は未婚ですが」

変な電話ではなさそうなので、シオリもいちおう名前だけは名乗った。

「それで、実は、姉が3日前から行方がわからなくなっておりますし

て、マンションの部屋に携帯電話は置いてありましたので、その履歴にあった方に、いろいろお尋ねしているわけでした」

「はい」

「姉が、どうしているか、お心当たりはないでしょうか？」

「川口さんからは、何日前にお電話いただきましたが、それだけです。あたしは、以前、一度お目にかかっただけですし、そんなに深いお知り合いではないので」

考えてみると電話があつたのは3日前だったが、そうすると、その後間もなく、川口加寿子は姿を消した事になる。

「川口さんの行く先に、全然心当たりはないのですか？　こう言うては何ですが、立派な大人でいらっしますし」

小山内加奈子は、失礼ですがと、シオリが川口加寿子とどんな関係なのかを尋ねてきた。シオリは自分が秋島淳子の生徒で、葬儀の帰りに会って少し話したのだと告げた。

「そうですか。では、姉のトラブルのことはご存知ですね？」

「トラブル？　ああ、手芸雑誌の記事のことですか？」

「ええ」

「それなら、多少は聞いています」

「そうですか」

小山内加奈子の口調には、それなら話がしやすいというニュアンスを感じたが、身内の盗作疑惑のことだけに、そう明るくは話せない気持ちも窺えた

「あれがあつた頃、姉は自殺未遂をしたことがあつたんです」

なんだか重たい話題になったので、シオリはどういう対応をしていいかわからなかった。しばらく沈黙が続いた後、携帯の中から小山内加奈子の声が流れてきた。

「それで、最近また、その関係で何かあつたようで心配なんです」

「やはり、ワイヤークラフトのことなんですか？」

「よくわかりませんが、たぶん、そうでしょう。でも、姉は、もう、そちらとは関わらないつもりだったと思いますよ。あの問題が起きた後で、そう言っていましたし」

シオリは黙っていたので、また、しばらく沈黙があった。

「でも、私は身内だし、あえて弁護させてもらうとですね」

小山内加奈子の話振りからは、控えめというか気の弱さを感じさせられたが、それでも、この言葉には、これだけは言っておきたいという勢いが込められているように感じられた。

「姉は、世間知らずだから出版社にそそのかされて、それで、あんな結果になったんです」

彼女なりに、盗作者の身内という汚名を払拭したい願望が秘められていたのかもしれないが、確認するすべはない。

「姉は結婚もしていないし、そういう期待ももてない。ということで、将来に不安を感じ、何か手に職をつけたいと考えてワイヤークラフトを始めたみたいです。ゆくゆくは作品を販売して収入を得るとか、人に教えるとか、その道でやっていけたらと考えていたみたいです。でも、その分それだけ真面目に取り組んでいたように、私には見えましたが」

シオリは半ば無意識に適当に頷いていたが、それはどうでもよかったのかもしれない。小山内加奈子の話はよどみなく続いた。

「それで、保険の仕事のお客さまと雑談をしているうち、ワイヤーをやっているという話が出て、その方がそれならばと知り合いの編集者を紹介してくれたのだそうです」

「ああ、そうだったんですか」

ずっと黙っているのに心苦しくなって、シオリは作為的な合いの手を入れる。

「秋島先生との著作権などの問題は、編集部の方から、すべて話がついてるといわれたそうで安心していました。専門の弁護士にも相談して、すべてうまくやったからって」

「そういうことは知りませんでした」

「こんなこと言っても、人からはつまらない弁解をしてると思われるだけだからと言ってました。だから、このことは私くらいにしか話してないと思います」

「どうも、失礼しました」

そう言って小山内加奈子は電話を切った。シオリからは川口加寿子の消息が得られないと判断したのだろう。

幼稚園から、誰かがユカを誘い出そうとした時の会話が録音されているので聞いてみて欲しいと連絡があった。

シオリが職員室に行った時、先生方は教室で、そこには園長先生のほかに男性が二人いたが、いわゆる保父さんではないようだ。シオリは、区役所か銀行から来た人かなと思った。

「こちらは、警察の方です」

園長先生から二人を紹介されたが、もう、あれから数日経っている。プロが、それほど逼迫した状況にはないと判断しているわけだから安心していいのかもしれないが、警察が動いてくれなかったためにたいへんなことになった例も報道されている。

電話の声が再生されたが心当たりはなかった。

「奥さんの方で、他に変わったことはないですか？」

刑事の一人が尋ねる。

「これとってありませんね。あ、いたずらの電話は時々ありますが」

「どんな電話ですか？よろしかったら」

「いつも、ボイススクランブラーの声でかかってくるんです。俺だよ、とか言つて、すぐ切れてしまうんですが」

「それだけですか。金を振り込めとかいうことはないんですね」

「ええ」

「まあ、世の中には欲求不満の奴がいっぱいいますから、迷惑な話ですが。」

以前、家に聞きこみに来た刑事と違って、ごく事務的な受け答えだなとシオリは思った。

「特に危険を感じるようなことがないのでしたら、心配なさらなくてもいいかと思いますよ。まあ、電話をかけてはいけないという法律はないわけですし、極端に回数が多くてノイローゼになったりした場合には傷害罪が成立しますが」

「ボイススクランブラーの電話は、他のお母さんにもかかっているようですよ」

「ほう、それは？」

園長先生の言葉は、ちよつと刑事の興味を引いたようだった。

「いえ、園児たちが帰る時、家が近くてバスを利用しない子供たちを迎えに来られた方たちが話しているのを、ちよつと小耳に挟んだだけなので、私は詳しいことを知りませんが」

刑事はまた、事務的な態度に戻った。

「園児さんの名簿から電話番号を調べているのかもしれませんが」

ユカが帰ってきた。

幼稚園では、いちおう、それほど憂慮する事態ではないという結論に達したので、シオリがバスを降りる場所まで迎えに行くのは止めにしたのだ。ユカと一緒に降り、連れだつて帰る友達もいるから、あまり神経質にならなくてもということだ。

ユカは帰りの挨拶代わりのように、こつ言った。

「ねえ、ママ。さっき、ヨーコお姉ちゃんに会ったよ」

「どこで？」

「バスを降りて、ちよつと歩いたところ」

「ふうん。うちに来るって言ってなかった？」

「うん、今日は、やめにするって」

「そんな近くに来たのに？ でも、なんで、そんなとこにいたのかなあ」

「落とし物をしたみたいで、その辺をきよきよ見てたよ。あたしが聞いたら、コンタクトレンズを落としたんだって。でも、探すの手伝ってあげようかって言ったら、そんなことしなくてもいいよ、だって」

「それで、そのまま別れたの」

「うん、車が来て、ヨーコお姉ちゃんは、それに乗って行っちゃったよ」

「どんな車？」

「よくわかんない。黒っぽくて、ああ、後の座席にギターが置いてあったかな」

「どうでもいいことかもしれないが、子供はごく小さいことも記憶している。」

「ふうん。ヨーコは視力2.0だったんだけどねえ。最近、目が悪くなつてコンタクトをしてるのかなあ」

シオリの言っていることは、ユカには、よくわからないようだった。

■ Act 17 ■

＜本日午前6時頃、東京都足立区の荒川河川敷に女性の死体があるのを、朝の散歩に来た近くの住民が発見し、警察に通報しました。死因はワイヤーのようなもので頸部を圧迫されたことによる窒息死と見られ、警察では事件、自殺の両面から捜査を開始しました。この女性は、数日前から行方不明になり、親族から捜索願が出ている茨城県の女性会社員ではないかと見られ、確認を急いでいます＞

シオリは、昼食をとりながら、テレビのニュースを見ていた。

画面では、ヘリから写した河川敷の映像が揺れている。子供用の遊具がある場所だ。青いビニールシートがかけられているのは死体のあった場所だろう。周囲には紺色の服の数人がいるが、警察関係者と思われる。

買物のついでに寄ったお気に入りのパン屋のデニッシュを、口に運ぼうとスル手が止まったままだ。

“ワイヤーのようなもので頸部を圧迫”。

この部分だけ長いエコーがかかったように、シオリの頭の中で繰り返されていた。

どうしても、あの夜のことがい起こされてしまう。

でもまあ、殺人にしろ自殺にしろ、今の世の中ではよくあることだから、自分には関係ない可能性の方が大きいだろう。シオリは、今後のニュースに注意しようと思いつながら、チャンネルをワイドショーに変えた。

夕食の支度をしている時、ラジオから短いスポットニュースが流れた。

<今日の早朝、東京都足立区の荒川河川敷で発見された死体の身元は、数日前から行方不明で搜索願の出されていた、茨城県の会社員、川口加寿子さんであることが親族により確認されました。失踪した前後の状況から自殺ではないかと見られています>

妹さんが心配していたが、やはり、川口加寿子は自殺していたようだ。

いくらかでも面識のある人間が自然でない死に方をすると複雑な気持ちになるものだとシオリは思った。

ワイヤーで首を吊ったのは、彼女がワイヤークラフトに、まだ心を残していたからなのだろうか？

ユカがキツチンに入って来た。

一人でヒップホップみたいな踊りをやっている。

特に用もないのだろうが、暇をもて余しているというか、ちょっとシオリに甘えてみたいのかもしれない。

血液中のアドレナリンが増えているのだろうか。シオリは自分が少し興奮気味なのを自覚している。手が震える状態まではいつてないが、ユカには自分の態度が不自然に見えるだろうかと思い、そのため、余計、ぎこちなくなっているかもしれない。

「こんなのが出てるよ」

翌朝、食事を終えたダーリンが出かける時、テーブルの上に開いたままの朝刊を置いて行った。

そこには、こんな全面広告が掲載されている。

クラフトファン待望の入門書、ついに明日発売！！

坊城小百合 著

『HOW TO ワイヤークラフト』

ベストセラー必至。

発売してすぐに売り切れが予想されます。最寄りの書店でご予約ください。

●坊城小百合先生をはじめ、厳選された講師によるワイヤークラフト教室を、来春、全国各地で開校します。将来に役立つ資格取得も可能。

●坊城小百合先生、TV生出演決定！！

10月23日AM9時よりJHK『それっきり大放送』

ガイアフレンズ出版局

ダーリンの思惑通り、シオリは興味を抱いて、その広告の隅々まで目を通した。使っている面積が大きいわりに、そこにある文章の量は少ないので、得られる情報は限られていた。

坊城小百合の写真くらい載せてもいいだろうにとシオリは思った。

いたい、どんな人物なのだろう。山銅商店に来たのはシオリと同じくらいの歳に見える女性だったようだが、彼女が坊城小百合かどうかはわからない。アシスタントだったりガイアフレンズ関係者である可能性も考えられるからだ。

とにかく、このテレビ番組はチェックするしかないだろう。シオリは放送時間とチャンネルをしっかりと頭に入れた。3日後の朝だ。

幼稚園の父母者会に出かけたシオリは帰りがけ、駐車場で、こんな会話を聞いた。話しているのは、どちらもユカと同じクラスの子供の母親だ。

「ボイススクランブラーは、機能としてついてる機種があるわよ」、「私は一時、声をわからないようにして夫がかけてるんじゃないかと考えたわ。夫は私が浮気していると疑って、俺だとか言っつかまをかけてるんじゃないかってね。それで、うっかりその相手の名前でも言ったらバレバレってわけなんだけど、そう思うと腹が立ってさあ。実は、夫が職場の若い子とできてるのは掴んでるの」

「そんなの、推理小説かドラマであつたんじゃない？」

「ああ、たしか、あつたわ。でも、それは、ご主人が奥さんを愛してるから、気持ち確かめたかつたんじゃないっけ？」

「そうか。おたくとは違うのね」

言われた方の母親は少しむっとした様子だったが、すぐに気を取りなおしたようで、会話は続く。

「木村さんは、オレオレに、不倫してる彼の名前を言って確かめちゃったらしいわよ。すぐ、怪しいと思ったんで、そこまでにしたら

しいけど」

「そんなこと掴まれて、相手がヤクザだったりしたらたいへんなことになっちゃうわよ。恐喝されるくらいならまだいい方で、売春をやらされることだってありそうだわ」

二人は、シオリに聞こえているのに気づいたようだが、構わず喋り続けた。

「でも、あの人、何で、そんな変な電話、みんなにかけてたんでしようね」

「自分以外の人楽しくやってるように見えるから妬ましかつたんじゃない？ ファッションとか食事とか習い事とか、不倫とか」

「でも、天網恢恢疎にして漏らさずって本当ね。けっきょく、バレちゃったんだから」

「どうしてバレたの？」

「安部さんに電話する時、うっかり短縮ダイヤルでかけちゃったのよ」

「安倍さんじゃあ、その話、すぐに広まっちゃったでしょう？」

「そういうことね。ご主人にまで文句を言ってみたみたいよ。お宅の奥さんには今までさんざん迷惑かけられたって。まあ、人の不幸は蜜の味ってわけね。ふふふ」

片方がシオリに視線を向けた。もう一人も、それに倣う。シオリは車のキーを捜す素振りをした。

会話は再開される。

「あの人、宗教にのめりこみすぎて離婚寸前だったらしいわよ」

「ふうん。お金も相当取られたんでしょね」

「可愛そうなのは子供よね。ケイコちゃん、どうなるんだろう」

「親権はご主人かなあ」

どうも、あの、ボイススクランブラーの電話はケイコママがかけていたらしい。

夕食の後片付けをしていると、ダーリンがKIOSKで買った夕刊紙がテーブルの上に残されていた。いつもは、そんなものに興味を示さないのだが、見出しのひとつが目にとまったので、シオリは手に取った。

荒川河川敷での女性自殺、実は他殺？

記事では、川口加寿子にはワイヤークラフトに関係した盗作疑惑があったことや、当事者が既に自殺していることなどが挙げられ、また、自殺の状況にも不自然な点があるので、何故、ワイヤーが使われたかということとともに、当局が重大な関心を寄せているとあった。

午後10時。

ダーリンはわりと早寝なので、そろそろベッドに行くらしい。といっても、しばらくの間、読書したりネットを見たりはするのかもしれないし、見たい番組があればPCで見れる。

まあ、とにかく。睡眠時間をたっぷり取るのは健康にいいはずだ。

シオリがリビングのテレビを消そうと、リモコンに手を伸ばした

時、アナウンサーが緊急のニュースを読み始めた。

<ワイヤーを使った無差別殺人の容疑者と見られる男たちの車が、パトカーに追われて事故を起こし、乗っていた4人全員が死亡しました>

警察が非常線を張っている様子が映し出される。画面の中で赤い光が目まぐるしい。

<今日の夕刻から、大田区、世田谷区などの東京西部で、歩いている女性を追いぬぎざまに、車からワイヤーの輪を掛けようとする無差別の殺人未遂事件が複数発生し、一人が全治3カ月の重傷、3人が軽傷を負いました。このため、警視庁は新たな犯行の防止と犯人逮捕に向けて緊急配備していましたが、杉並区内でパトカーが目撃者の証言と類似した車を発見、停止を命じました。しかし車は逃走し、100キロ以上のスピードでセンターラインを越えて対向車に衝突したものです。乗っていた4人は病院に運ばれましたが、全員の死亡が確認されました。また、対向車のふたりも……>

画面は警察署の中継から文字に変わった。

■死亡

企画会社専務 金村光之助（54）

企画会社プロデューサー 小柳博人容疑者（28）
他2名

顔写真は出てなかった。まだ入手していないのだろう。

企画会社としか報道されないが、山銅商店で見せてもらった名刺

の名前は、たしか小柳 博人だったとシオリは記憶している。肩書きはプロデューサーで、社名はガイアフレンズだった。

同姓同名というのはよくあることだが、そうでなければ、坊城小百合を擁する一連のワイヤークラフトのプロジェクトに関係している人物ということになる。

毎夜の如くシオリがインターネットぶらついていると、携帯が鳴った。いたずら電話の犯人が判明し、もうかかってこないことがわかってから、もう、着メロの連鎖反応で気分が重くなることはない。

「シオリ、こんばんは」

「ああ、ヨーコ。しばらくね。元気？」

「うん、まあ」

「この間、うちの近くでユカと会ったんだって？」

「うん、そうなの」

「来ればよかったのに」

「でも、いつでも行けるよ」

「うん、いつでもおいでよ」

「私、ちよつと、シオリの声を聞きたかっただけだから、また電話する。じゃあね」

ヨーコの声は、どことなく沈んでいるように感じられたが、後になって考えた時、そこに、ある種の透明感があつたように思われなくもない。

電話が切れた後、しばらくして携帯にメールが届いた。ヨーコ

からだった。電話で話し足りなかったのだろうか、それとも、単なる気まぐれだろうか。

メールにはURLが書かれた後、“これを見るにはパスワードが必要”と、文字列が記されたものだった。

■ A c t 18 ■

ヨーコのメールにあったURLにアクセスすると、認証画面が現れた。やはりメールに記載されていたパスワードを入れる。

ブログのトップページに入った。タイトルは『Y o k o』だった。最初の記事は去年の秋に書かれているから、約1年前だ。それから毎日必ずというわけではないが、そこそこの頻度で書かれていた。

今日から、この日記を書く。

考えがあつて、パスワードを入れないと見れない設定にした。いまのところ、彼にもパスワードは、というか、日記の存在自体教えていない。だから、見るのは自分一人だ。

日記というのは人に見せるものだろうか？

例えば、プロのライターが書くものでは、そういうこともあるだろう。

だが、私の場合、これを広く公開する気にはなれない。とは言っても、読んで私を理解してくれる人がいたらと思わないわけではない。

自分だけの秘密として他人に見られたくない気持ちがある一方で、見てくれる誰かを求めている。

10月1日

これが、第1日目の日記だ。

去年のうちは、“彼”に関する記述が多かった。

“彼”と食事したこと。“彼”と街をぶらぶら歩いたて、何ということはないが楽しかったこと。“彼”のバイクの後ろに乗って、ちよつと遠出したこと。彼の部屋で、いろいろなCDを聴いたこと。クリスマスのさまざまなこと。

“彼”はミュージシャンだ。ストリートで歌っている。

恋愛詩のようなものも、よく見かける。

年が明けた頃、“彼”とは、あまり会えなくなったらしい。

“彼”にメジャーデビューの話があり、忙しくなったのだ。

“彼”の名前は城崎ケンジ。

2月辺りから、日記は、また以前と同じような日々の記述になるが、“彼”の部分は“ピート”に代わっている

この後、シオリの興味を引く内容が出てきたので、日常の記録は飛ばして読んでいった。

ピートのストリートライブを見に来る常連さんに居酒屋へ連れて行ってもらった。いろいろ話したが、イベントや出版の企画をやっている会社の専務さんらしい。私の紙切りに興味をもったようだ。一度、会社へおいでという。少しは運が回って来たかな。でも、あまり期待はしないことにしよう。今まで、いつも外れで、取らぬ狸のなんとやらばかりだったんだから。

7月14日

例の専務さんの会社、ガイアフレンドに行った。
向こうの人たちは大乗り気で、紙切りの教室を開いたり私の本を出す話が盛り上がった。

うまくいくといいな。
そうすれば多少はお金が入るだろうし、それよりも、社会的に認められる場所にいれば、ピートとの結婚だって、両親や周囲に反対されないはずだ。

7月18日

午後、ガイアフレンドに行く。

専務は社長に会わせると言っ、私を最上階の部屋に連れて行った。社長は白髪だが、皮膚の艶がよく、身体も頑健そうだった。

専務は彼を“社長”ではなく“聖師”と呼んだ。

秘書らしい女性や時々部屋に入ってくる他の社員も同様にしていた。

7月25日

会社へ行くと、突然専務がこう言った。

「わが社では今後、ワイヤークラフト関連の事業に力を入れていく方針です。

あなたには、名実ともに、その中心となっていたく。

つまり、我々が担ぐお神輿、あるいはスターと言ってもよいが、何事にも、そういうものは必要だ」

切り紙じゃないのか。どこで話が変わったんだろう？

専務は、大丈夫だの一点張りだ。

その方面に詳しい人が基本は同じだと言っている。

専務は私に1冊のノートファイルを渡してよこした。

中にあるのは、どこかの教室のテキストらしい。

講師：秋島淳子。

たしか、シオリの通っている教室の先生だ。

どうやってこんなものを手に入れたのだろう？

中を見ると、切り紙とワイヤークラフトの類似点を書いたページもあった。

専務は取り合わなかった。

「切り紙よりワイヤークラフトの方が、事業を大きく展開でき、利益も上がるだろう。著作の出版、教室の全国的展開、メディアへの露出など、すでに計画は練られている」

その後、社長室に行くと、聖師はこんなことを言った。

「一芸に秀でた者は、何の分野でも、それなりのことをできるんだ。私が太鼓判を押すよ。私に人を見る目があるのは何万人もの人間が認めているじゃないかね。それも、凡人とは違うレベルの眼力であることを。ガイアフレンドの会員数や私の本がどれくらい売れているかは君も知っているだろう」

聖師はいつものように、この言葉を付け加えた。

「どうだい。こんなこと、凡人には考えつかないだろう？」

8月3日

昨日の続き。

私は、基本的な知識も文章能力もないのに、本を書くなんて無理だと言った。

いや、大丈夫です。その方面のプロがいますから。たしかに、いい本というのは絶対生み出せるものではない。才能や知識といったものが必要だし、それでも必ずできるわけではないのだ。

しかし、と専務は言った。売れる本なら、プロは必ず作れるノウハウをもっています。

金を使えば宣伝もできる。裏も表もね。プロデューサーを買収してテレビに出ることも可能だし、もっと客観的に見えるところでのひそやかな宣伝というのものもある。例えば、新聞にベストセラーの番付があるが、よく見てご覧なさい。実は、あれは一店舗だけのデータなのです。まあ、都心の有名書店ではあるけれどね。出版社は新聞に本の広告を出す。それで、バイトを雇うなりして、その書店で件の本を買い漁る。新聞社は、そんなことわかってるが、何食わぬ顔で客観的記事の如く、その結果を書くんだよ。半端な金額じゃない広告費を出してるんだから、そのくらいの見返りがなければね。

専務は、私の目を覗き込むようにして笑った。

8月4日

専務に、ワイヤークラフトなら、友達がやっていて彼女の方が適役

ではないかと言ってみた。専務は通っているお教室などシオリのことをいろいろ尋ねた後、しばらく黙想のようなことをしていた。それから告げられたのは、考えておくが、私がワイヤーに関わることになったのをシオリには黙っているようにということだった。よくわからないが、業界はいろいろと難しいので、不都合が起きたら困るのだそうだ。

私も、シオリをガイアフレンドに関わらせたくないと思い始めたので、その方がいいかとも考える。会社という形態をとっているが事実上は聖師を教祖とするカルトであり、信者や世間を騙して金儲けするのを目的とする胡散臭い連中なのだから。

備品などを見ると、ガイアフレンド出版部は以前、女性生活社という社名だったようだ。聖師は多くの元信者から訴訟を起こされていて、その費用がたいへんなことも、社員たちの雑談で耳に挟んだ。

8月22日

坊城小百合。

聖師が姓名判断でつけたそうだ。

「まあ、私のやり方は、そこらの通俗的占い師とは違うからね」
今日の聖師は、いつもの高価そうなスーツ姿ではなく、白い法衣のようなものを着ていた。

「だけど、あなたの運勢はもつと向上するよ。私がエネルギーを注入してあげればね。まあ、そのうち」

聖師は意味ありげな微笑を私に送ってきた。

「でも今、あなたは大事な商品だから」

聖師は、ああそれから、と言って一枚の紙を取り出すと、私に手渡した。簡単な形と寸法を書いた図面のようなものだ。

これは儀式で使うのだと聖師は言った。

大きさがだいたい合っていればデザインは私の自由でいいとのことだった。

バスケットのようなものでいいですかと尋ねると、聖師は満足そうに微笑み、頷いた。

9月4日

社長室で専務は、開設する教室では資格を与える方が、生徒も喜ぶし、利益にもなると提案した。

聖師は、それに賛同の意を示し、言った

「人間というのは寄る辺ないものだからね。

おおよその人間は寄る辺を必要とする。よくあるものとしては家族とか恋人。まあ、国家などというものもそうだな。職業というのも、収入を得ると同時に、ある組織に所属する、この点が重要なのだよ。

資格というのも、何とか寄る辺の欲しい人間が必要とするのだね。

自分が無能で魅力もなく空っぽであることを、誰よりも自分が知っているのだ。まあ、それは、意識の深層レベルにあるのだろうが。彼らが今ある現実をしっかりと意識したら生きてなどいられまい。

ねえ。こんなこと、凡人には考えつかないだろう？」

9月6日

秋島さんの家にお邪魔した。

メンバーは、私と専務と部下5人。

ピートもガイアフレンドプロデューサー、小柳博人として同行する。拒絶されていたが、私がシオリの友人なので会ってくれることになったらしい。

部下のうち4人は車で待機。

その他が家に入る

専務は、いろいろ、秋島さんの説得を試みていたようだ。

秋島さんの言葉で私の耳に残っているのは、こんなこと。

「ワイヤークラフトが多くの人に認知されるのは大賛成です。坊城さんという方がスターになることも必要かもしれませんが、私は、表に出たいとは思わないのです。でも、ワイヤークラフトの資格とかいうのに、私は関わる気がまったくありません。だって、もし、幼稚園に通ってるような子供が凄いインパクトのある作品を作ったら、この道何十年とかいばつても要するに負けなんですからね。ワイヤークラフトって、そういう資質のある人なら、独学で、どん

どんやっていけるものなんですよ。まあ、それは何の分野でもいいえるのかもしれませんがね」

話が行き詰まった時点で専務が目配せすると、部下とピートが秋島さんを羽交い締めにする。何かの薬を取り出して秋島さんの口に押し込み、さらに、水差しから水を流し込んだ。

やがて、ぐったりした秋島さんをベッドに運び、部下はバッグからあるものを取り出した。私が聖師の依頼で作ったワイヤークラフトだ。専務はそれを秋島さんの顔の上にかぶせ、ビニール袋で被う。部下とピートは袋の端をガムテープでしっかり目張りした。

専務は私に言った。

「あなたは、この場にいたけれど、私たちを止めもしなかった。これは共犯にあたり、罪に問われることとなります。まあ、ピート君を刑務所に送ったり、これからあなたが歩む輝かしい未来をチャラにしてしまうなんてことを、まさか考えたりはしないでしょうけど。変なことをしなければ、まだ、あなたの人生は長いんだし」

10月9日

気が向かなかったのだが、それを押さえて会社に行くと、専務の机の上に巻かれた真鍮線や工具が並べられていた。

「昨日、帰りがけにやって来た男だがね。こんなものを持っていたよ。ワイヤーの関係者なのかな？」

私は、知らない人だと言った。

「まあ、顔を見られてるし、始末しといてよかっただろう。着てるものが汚いし、家族などいないような生活をしてそうだな。うまくいけば、彼がいなくなっても誰も騒がない」

秋島さんの家を出ていく時、ちょうど玄関のチャイムが鳴った。「母親か？帰って来るのが早いな」と専務の形相が変わる。秋島さんの身辺や状況は調べてあるらしい。

ドアを開けるとホームレスのような男が立っていた。

「秋島淳子さんていますか？」

専務が目配せをすると、部下の一人が素早く男にスタンガンを押すつける。

気絶した男は車のトランクに入れられた。

私が知っているのは、そこまでだ。

10月10日

シオリは、似顔絵書きの友人の“元祖ヒッピー”が頭に浮かんだ。ピアフに行ったのも彼だろう。時間的な経緯からも、それが窺える。

シオリが、携帯に保存した写真を見せた時、私は平静を保つのにたいへんだった。

あれを作るには心血を注いだというか、まあ、かなり力を入れてやったのだ。

ネットで作家さんたちのサイトを周ったり、生作品も見に行ってみた。考にした。

アートロッカーでも。

しかも、ユカちゃんが、そんなことに気づいていたとは。子供の感性の豊かさは、私がおおいに評価するところだったのだけれど、それが、こんなふうに現れるのか思った。

シオリは気づかなかったと思うが、あの時、ピートの目は恐かった。彼は以前、ヘビメタバンドで悪魔崇拜や殺人の曲を演奏していたのだが、その頃のビデオで見る目より、もっと凄かったかもしれない。まさか、ユカちゃんに何か……とは思うが。

10月20日

日付は、シオリがヨーコに誘われ、居酒屋でピートにあった日の深夜だ。

一緒に出かけた時、ピートは、携帯を忘れたわけでもないのに公衆電話を使い、私と代わろうとして、結局止めた。最近、ピートや専務が、自分たちの動きを私に知られないよう、気を配っている感じがする。

それで、今日、ピートに問いただしてみた。

まさか、そんなことまでしていたとは。

10月23日

ピートが使ったワイヤーを、その場所まで探しに行った。小さな証拠でも、残すと、後でどうなるかわからないと思ったのだ。でも、何だかわからないまま、居ても立ってもいられなくなったというのが本音だろうか。

ワイヤーは、結局見つからなかった。あれから日にちが経っているし、誰かが片付けたのだろう。

私は慎重さを欠いていた。ユカちゃんに会ってしまった。なんだから、世界が砂になって、だんだん崩れていく感じがする

10月26日

ピートの携帯に入った通話。

大声で喋っているの、その声が洩れ、私にも聖師からだとわかる。その内容も一部聞き取れた。

川口加寿子からワイヤークラフトの関係を辿ったら、捜査が自分たちになで及ぶかもしれない。だから、……。

ワイヤーを使った無差別連続殺人が起き、川口加寿子の場合も、その一環だったと警察が考えれば……。

どうだい。こんなこと、凡人には考えつかないだろう？

10月28日

テレビ出演が決まったと専務が言っていた。
当然、シオリも見ろだろうな。

そこから、だんだん明るみに出ていく事実。

何とか引き返せないだろうか？
無理か。

10月31日

最後の日記だ。

別にピートが死んだから、彼の後を追うわけじゃない。彼を愛していたのかどうかだってわからないのだから。

私は、ピートの前にケンジという、やはりストリートミュージシャンとけっこう深く付き合っていた。ケンジは才能が、まあ、あった

のだと思う。だってメジャーデビューが決まっているから。

ケンジが何かと忙しくなり、会えない日が続いた。そういう心隙をついてというやつだろうか。ピートが私の中に入ってきたのだ。無理矢理……とか言えばそうかもしれないが、私の中のどこかでピートを誘っていたのだろう。

ピートはケンジにメジャーデビューで差をつけられたが、ケンジの女である私を自分のものにしたことでは自分に対して面目を保つことができたのだと思う。

ピートは自意識が強いから。

シオリ、さようなら。

この日記をどうするかは、あなたに任せます。

11月2日

■ Epilogue ■

「ヨーコお姉ちゃん、最近来ないね」

「うん、そうだね」

「どうしてかなあ」

「ヨーコお姉ちゃんは亡くなったのよ」

「亡くなったって、死んだってこと？」

「そう」

「どうして、病気？」

「病気じゃないわ。事故」

「事故って交通事故？」

「交通事故じゃないけど。事故よ」

「ふうん」

シオリは製作途中のフィギュアスケートのオブジェをかざして眺めた。

ワイヤーの線状がずっと伸びずに少々もたついていたり、形が歪んでいたりするところに芸術的な趣があるといえないこともないのだが、そういう部分を腕が稚拙と理解されそうな気がして、どうしても、機械が作ったように見えるものを目指したくなる。

「ママも、そのうち有名になるよ」

「そうかなあ？」

「あたしが、シンガーソングライターでビッグになれば、ママのところにマスコミの取材が来るからね」

最近ユカは、よく、ギターが欲しいと言っている。

「そうだね。そういう可能性はあるよね」

ユカに、ヨーコが自殺したと言うのは、ちょっとはばかられた。それを聞いたら、「どうして？」という質問があるのは目に見えている。シオリは、それにどう答えていいか、自信がない。

しばらく経ったある日、ユカはふと思い出したように呟いた。

「ヨーコお姉ちゃんは自殺したんじゃないかなあ」

あるいは、どこかでシオリの言葉に聞き耳を立てていたり、拳動からそういうことを類推したのだろうか。

それとも、子供独自の、大人の論理的な世界とは別のシステムが存在し、それによって認識するのだろうか。

ガイアフレンドは一連の事件や脱税で当局の摘発を受けたが、カルト問題など珍しくないし、忘れられてしまうのに75日も必要ない。

シオリは携帯を取った。ヨーコの日記にアクセスする。

カウンターは163だ。シオリがこの前アクセスした時は162だった。シオリは警察を含む誰にも、このことを知らせていない。

パスワードを記入して、管理ページに入った。

ユーザー情報の下にメニューがあり、シオリはそこから“日記の削除”を選択した。

確認のページが出る。

いったん削除すると、もう、データを回復することはできません。
ほんとうに削除しますか？

— はい —

ページが変わる。

日記は完全に削除されました。
ご利用ありがとうございました。

— The End —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541b/>

ワイヤークラフト殺人事件

2011年7月26日10時06分発行